

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第 7 集

1997年 3 月

出 雲 市 教 育 委 員 会

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第 7 集

1997年 3 月

出 雲 市 教 育 委 員 会

序

出雲市は、県下でも有数の埋蔵文化財の宝庫として知られています。これらは貴重な文化遺産として保存し、活用していかなければならないものです。しかしながら、近年の開発ブームはとどまることを知らず、貴重な文化財が少しずつ破壊され、失われていくのが現状であります。

出雲市では、平成元年から出雲市埋蔵文化財調査報告書を刊行し、今までに紹介できなかった埋蔵文化財のいくつかを記録として残してまいりました。

今年度は、平成6年度に発掘調査をしました善行寺遺跡（塩冶町）、平成8年度に発掘調査をしました地蔵堂横穴墓第3支群（下古志町）を報告書としてまとめ、ここに第7集として発刊の運びとなりましたが、今後もさらに埋蔵文化財保護行政を推進するための一環として刊行してまいりたいと考えています。

本書を発刊するにあたり、調査にご指導、ご協力を賜りました皆様に、心よりお礼申し上げます。

平成9年3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

例 言

1. 本書は、これまでに実施した発掘調査のうち、未報告のものの一部についてまとめたものであり、下記の2遺跡について取り扱っている。

善行寺遺跡 ……第6号・第8号区画道路（第10号水路）整備事業に伴う発掘調査
地蔵堂横穴墓群（第3支群） ……土地造成工事に伴う発掘調査

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

善行寺遺跡 ……平成6年（1994）11月24日～12月28日
地蔵堂横穴墓群（第3支群） ……平成8年（1996）4月24日～6月18日

3. 発掘調査地の地番は、次のとおりである。

善行寺遺跡 ……出雲市塩冶町字善行寺1251-7
地蔵堂横穴墓群（第3支群） ……出雲市下古志町1843-1

4. 善行寺遺跡の発掘調査体制は次のとおりである。

調査主体 出雲市教育委員会
事務局 野津 建一（文化・スポーツ課課長）
新宮 雅子（同 課長補佐）
調査指導者 広江 耕史（島根県教育委員会文化課主事）
調査担当者 米田美江子（文化・スポーツ課嘱託員）
岸 道三（同 主事）

5. 地蔵堂横穴墓群（第3支群）の発掘調査体制は次のとおりである。

調査主体 出雲市教育委員会
事務局 後藤 政司（文化振興課課長）
調査指導者 岩橋 孝典（島根県教育委員会文化財課主事）
調査担当者 松山 智弘（文化振興課主事）
高橋 智也（同 主事）
藤永 照隆（同 主事）

6. 調査にあたっては、地元の方々から多大の協力を得た。

7. 本書の編集は出雲市教育委員会が行ったが、執筆分担については、次のとおりである。

善行寺遺跡 ……岸 道三
地蔵堂横穴墓群（第3支群） ……高橋 智也

8. 池田満雄（鳥根考古学会会長）、西尾克巳（鳥根県埋蔵文化財調査センター係長）、角田徳幸（同文化財保護主事）、守岡正司（同主事）からは、有益なご指導、ご助言をいただいた。記して謝意を表します。

9. 遺構の略称記号は、次のとおりである。

SD（溝状遺構） P（ピット状遺構） SX（その他の遺構）

10. 本書に使用した方位は磁北を示す。

11. 発掘調査、遺物整理、トレース等については、次の方々の協力を得た。

善行寺遺跡

発掘調査	奥田 広信	米山 清司	佐藤 保信	小玉 勇	吉田 栄
	吾郷 要子	高根 常代	安食 勉	鐘推 蔵吉	藤原 恒治
	吉川 善美	園山 薫			

遺物整理等	遠藤 恭子	鵜口 令子	飯國 陽子	川谷 真弓	太田 和子
	吹野 初子	荒木恵理子	岡野 和栄		

地蔵堂横穴墓群（第3支群）

発掘調査	小玉 勇	公田 悦郎
------	------	-------

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

善行寺遺跡

1. 位置と環境 1
2. 調査に至る経緯 3
3. 調査の概要 4
4. ま と め 17

図 版

地藏堂横穴墓群（第3支群）

1. 調査に至る経緯と遺跡の概要 23
2. 位置と環境 24
3. 発掘調査の概要 29
4. ま と め 34

図 版

挿 図 目 次

善行寺遺跡

第1図	善行寺遺跡周辺の遺跡	1
第2図	発掘調査区位置図	3
第3図	SD02出土遺物実測図	4
第4図	SD01～SD04遺構実測図	5
第5図	南北ライン遺構実測図	6
第6図	南北ライン遺構外出土遺物実測図	6
第7図	南北ライン遺構配置図	7・8
第8図	SD07出土遺物実測図	9
第9図	SD08出土遺物実測図	9
第10図	SD07～SD09遺構実測図	9
第11図	SD10出土遺物実測図	10
第12図	SD10遺構実測図	10
第13図	SD11遺構実測図	11
第14図	遺物出土状況（緑灰色砂層）実測図	11
第15図	緑灰色砂層中遺物実測図	12
第16図	東西ライン遺構外出土遺物実測図	12
第17図	東西ライン遺構配置図	13・14

地蔵堂横穴墓群（第3支群）

第1図	地蔵堂横穴墓群 横穴墓配置図	23
第2図	地蔵堂横穴墓群周辺遺跡分布図	24
第3図	出雲平野主要遺跡分布図	27・28
第4図	地蔵堂横穴墓第3支群1号穴遺構実測図	30
第5図	埋土堆積・閉塞状況図	31
第6図	遺物・礫床出土状況図	32
第7図	第3支群1号穴出土遺物実測図	33

善行寺遺跡

1. 位置と環境

善行寺遺跡は、出雲平野のほぼ中央、出雲市塩冶町字善行寺に所在している。遺跡の北東約300mには、JR出雲市駅があり、南方には、田園に囲まれた民家や畑が広がっている。遺跡の規模は明らかではないが、平成7年度に発掘調査を実施した藤ヶ森遺跡（II地点）が北東約100mの位置にあり、出土遺物の時期も重なる部分があることから、性格的には、同じ遺跡の範疇に入るものと考えられる。なお、遺跡の南方に広がる田畑においては、今のところ遺物の散布は認められていない。

出雲平野には、旧神戸川と斐伊川によって形成された旧自然堤防と呼ばれる微高地が南北方向に幾筋か伸びている。善行寺遺跡の周辺にも、この旧自然堤防の微高地上に数多くの遺跡が存在している。西には、弥生時代中期頃から近世に至るまで生活が営まれ、出雲平野を代表する遺跡の一つである天神遺跡がある。当該遺跡では、これまでの発掘調査によって、壺棺墓や巨大な柱穴、環壕など多くの遺構が検出されている。また、弥生土器・須恵器の散布地として知られる高西遺跡も近くに存在している。東には、古墳時代後期を中心とした遺跡として知られ、土壙墓などを検出した角田遺跡、中世の遺物が多く出土した藤ヶ森遺跡（I地点）が存在している。さらに、北には横穴式石室を有し、家形石棺を1基置いた今市塚山古墳があり、南方約700mほど離れたところには、神門寺境内廃寺、神門寺付近遺跡などが存在している。



第1図 善行寺遺跡周辺の遺跡

1. 善行寺遺跡
2. 天神遺跡
3. 高西遺跡
4. 伝塩冶氏館跡
5. 弓原遺跡
6. 塩冶小学校付近遺跡
7. 神門寺付近遺跡
8. 古志本郷遺跡
9. 塚山遺跡
10. 大念寺古墳
11. 樋野祐平遺跡
12. 平家丸城跡
13. 久微園横穴墓
14. 下沢遺跡
15. 何山遺跡
16. 下沢会館周辺遺跡
17. 宮松遺跡
18. 築山遺跡
19. 塩冶判官館跡
20. 寿昌寺遺跡
21. 寿昌寺西遺跡
22. 地藏山古墳
23. 池田遺跡
24. 半分遺跡
25. 出雲工業西遺跡
26. 半分古墳
27. 上塩冶横穴墓群
28. 半分城跡
29. 藤ヶ森遺跡（II地点）
30. 藤ヶ森遺跡（I地点）

このように、出雲平野の旧自然堤防上には、多くの遺跡が存在しているが、より古い時期の遺跡は、平野の縁辺部で認められている。平野の北にある菱根遺跡、西の砂丘下にある上長浜貝塚からは、縄文時代早期の土器が出土し、この2遺跡が出雲平野における遺跡の初源となっている。続いて縄文時代後期・晩期になると、善行寺遺跡から南方1.5kmほど離れた丘陵下にも、三田谷遺跡が営まれ、人々の生活の場となっていたことが、近年の発掘調査によって明らかになっている。また、同時期には、北部の出雲大社境内遺跡や原山遺跡から遺物が出土しているほか、平野中央の矢野遺跡からも少量の遺物が確認されている。しかしながら、縄文時代における生活の場は平野の縁辺部が中心で、平野の中央部では、現在のところ大規模な遺跡は認められていない。このことは、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に記されているように、周囲18kmにもなる「神門水海」と呼ばれる瀉湖が平野中央部まで達していたこととともに、出雲平野における縄文時代の人々の生活が、依然、漁撈・狩猟・採集に頼っていたことを窺わせる。

弥生時代になっても、前期の遺跡は矢野遺跡以外には平野部に認められていないが、弥生時代中期中葉以降、平野部において遺跡は爆発的に増大し、矢野遺跡、天神遺跡、古志本郷遺跡、正蓮寺周辺遺跡などの拠点的な大規模集落が営まれるようになる。これは、肥沃な土地を背景に、農業生産力が向上し、定住できる環境が整ったためと考えられ、古墳時代前期に至るまで引き続いて発展している。古墳時代中期の遺跡や古墳は、今のところ小規模なものしか認められていないが、後期後半になると善行寺遺跡の周辺にも、今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳、地藏山古墳、塚山古墳など横穴式石室を有する大規模な古墳が築造され、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が台頭してきたことを窺わせる。しかしながら、巨大な古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大規模集落遺跡は、現在のところ確認されておらず、角田遺跡などで少量ながら当該期の遺物・遺構を検出しているにすぎない。

奈良時代にも平野部に遺跡が点在しているが、善行寺遺跡がある塩冶地区でも、西方には神門郡家に比定され、大型の掘立柱建物などが検出されている天神遺跡があるほか、南には神門寺境内廃寺、東には長者原廃寺といった仏寺が建造されるとともに、菅沢古墓などの初期火葬墓があり、仏教文化がいち早く取り入れられ、出雲平野の中でも生活の適地であったことが窺われる。

中世には、塩冶地区に大廻城、大井谷城、半分城、権現山城などが築城され、出雲守護職塩冶氏のもと、出雲国の政治的中心地として繁栄している。また、戦国時代には、一時期尼子経久の子、興久が塩冶郷一带を所領としていたことがある。

善行寺遺跡は、以上のような位置環境のもと、主として弥生時代後期頃から奈良時代にかけて、生活が営まれていたようである。

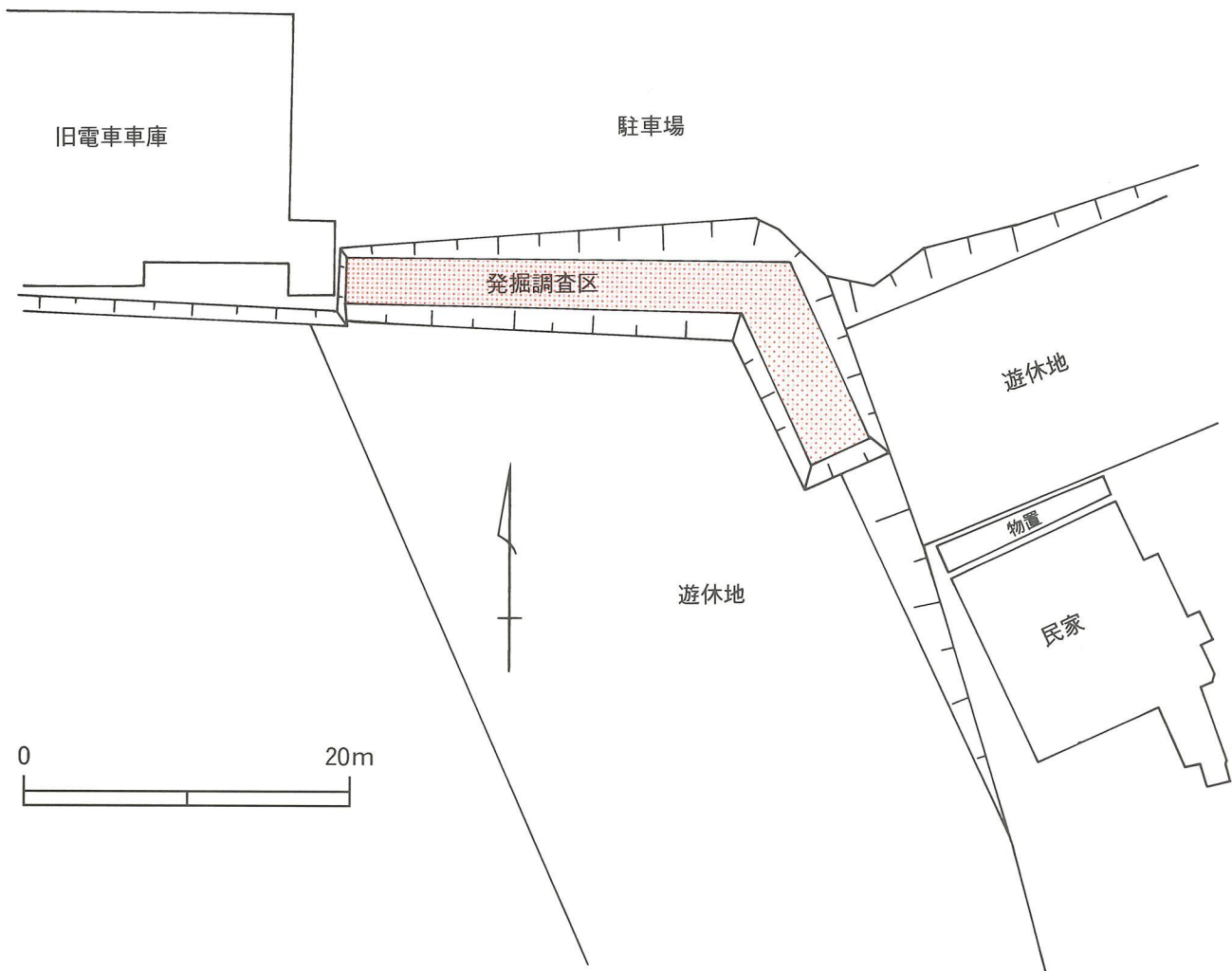
2. 調査に至る経緯

平成6年(1994)7月、出雲市駅周辺整備課より、第6号・第8号区画道路(第10号水路整備工事)予定地における埋蔵文化財の有無についての照会を受けた。付近には、角田遺跡、高西遺跡など多くの遺跡が存在する位置環境から、同年11月7日に試掘調査を実施した。

試掘調査は、事業予定地内に2カ所のトレンチを設定し、徐々に掘削しながら遺構・遺物の有無を確認した。その結果、はっきりとした遺構は検出できなかったが、2カ所のトレンチの両方から、土師器、須恵器などの遺物が出土したため、駅周辺整備課と協議し、発掘調査をすることで合意した。

当該地は、試掘調査によって遺物が確認されるまでは、周知の遺跡とはなっていないため、まず事業者側から遺跡発見の通知(文化財保護法第57条の6)を提出し、字名をとって善行寺遺跡と命名した。出雲市教育委員会では、これを受け埋蔵文化財発掘調査の通知(同法98条の2)を11月22日付で文化庁長官宛通知した。

発掘調査は、平成6年(1994)11月24日から開始した。途中、粘質土と湧水により水処理に悩まされたが、同年12月28日に発掘調査を終了した。調査面積は、南北ライン約5m×15m、東西ライン約4m×30mの約200㎡である。



第2図 発掘調査区位置図

3. 調査の概要

発掘調査に先立って、省略化するため、試掘調査によって確認されていた造成土の部分を重機によって掘削し、排土した。そして、南北ラインに4m四方のグリッドを設定し、南からC1Gr～C3Grとした。東西ラインは3m四方のグリッドを設定し、東からA1Gr～A10Grとしたのち調査を開始した。

調査は、上層から徐々に掘り下げ、プランを確認しながら順次東西ライン及び南北ラインの調査を進めていった。

堆積土状況

調査区での層序は、南北ラインと東西ラインではかなり異なった様相を示している。

南北ラインは、上層から鈍い黄色土（黄褐色土）、オリーブ黄色土、暗灰黄色粘質土、青灰色粘質土となり、地山である灰色砂層に達するが、北側には一部、明褐色のシルト層が広がっている。一方、東西ラインでは基本的に上層より暗灰色土、オリーブ黄色粘質土、黄灰色粘質土（オリーブ褐色粘質土）、緑灰色粘砂層、緑灰色砂層の層序となっている。

遺物

遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などが出土しているが、全体でコンテナ2箱分と少ない。縄文土器、弥生土器は数片であり、遺構に伴ったものは少ないが、東西ラインの緑灰色砂層からは縄文時代晩期の土器がまとまった形で出土しているのが注目される。出土量としては須恵器が最も多く、その大部分は東西ラインの安定した遺物包含層である黄灰色粘質土、オリーブ褐色粘質土からの出土である。また、遺物のほとんどが細片であり、完形に近い形で出土したものはなかった。

遺構

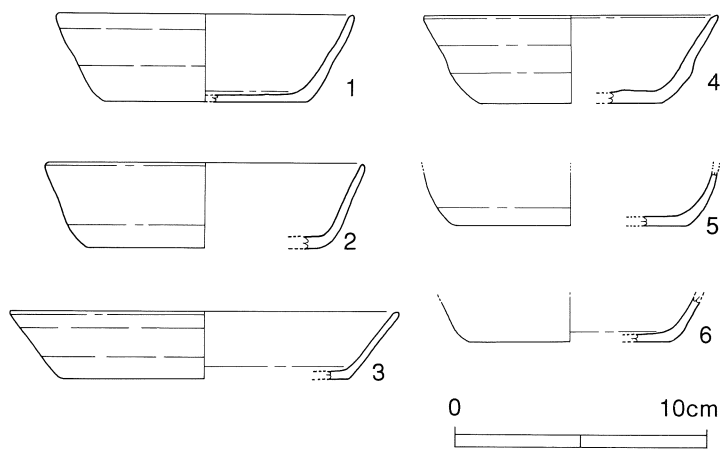
遺構は、南北ラインのオリーブ黄色土上面で、奈良時代の溝状遺構を4検出している。また、灰色砂層、明褐色シルト層上面において古墳時代終末から奈良時代にかけてと考えられる溝状遺構6、落ち込み状遺構6、ピット状の遺構などを検出している。

また、東西ラインでは、緑灰色粘砂層上面において溝状遺構5、ピット状遺構1を検出しているが、いずれの遺構も弥生時代後期頃のものと考えられる。

① 南北ラインの遺構・遺物

SD01～SD04（第4図）

南北ラインのオリーブ黄色土上面において検出した溝状遺構で、北北西方向に規則正しい配列で伸びている。北側は上部の削平により検出できなかったが、長さは10m以上を測る。いずれの溝も検出幅約35cm、深さ約10cmを測り、覆土には灰色粘質土が堆積している。



第3図 SD02 出土遺物実測図

出土遺物は少ないが、SD02からは内外面朱塗りの土師器が6点出土している。(第3図)

1～4は、底部からやや内湾しながら立ち上がり、端部を丸くすぼめるようにおさめた朱塗りの坏で、底径8～9cm、器高3.5cm程を測る。5は、他と比べてやや浅く、底径11.5cm、器高2.7cmを測る坏である。これらの出土遺物は、その特徴より奈良時代のものと考えられる。

遺構の性格は、出土遺物が少なく判断し難いが、内外面朱塗りの土器が日常的に使用されたものとは考えにくいことから、祭祀に伴う遺構の可能性もある。

SD05、SD06 (第5図)

南北ラインの第2遺構面、灰色砂層の上面で検出された溝状の遺構であり、北北西方向に伸びている。

SD05は、幅約60cm、深さ約22cm、長さ5.2m以上を測る。覆土には粘質土が堆積していることから、水路のような施設であったことが考えられる。遺物は数点であるが、古墳時代終末期と考えられる須恵器小片が出土していることから、遺構の時期も当該期と考えるのが妥当であろう。

SD06は、幅約22cm、深さ約12cm、検出長3.8mを測る。SD05と並ぶような配置で北北西方向に伸び、覆土には粘質土が堆積している。出土遺物はなかったが、覆土、形状がSD05と相似していること、周辺のピット群から須恵器小片が出土していることから考えると、SD05と同様に古墳時代終末期の遺構と考えられる。

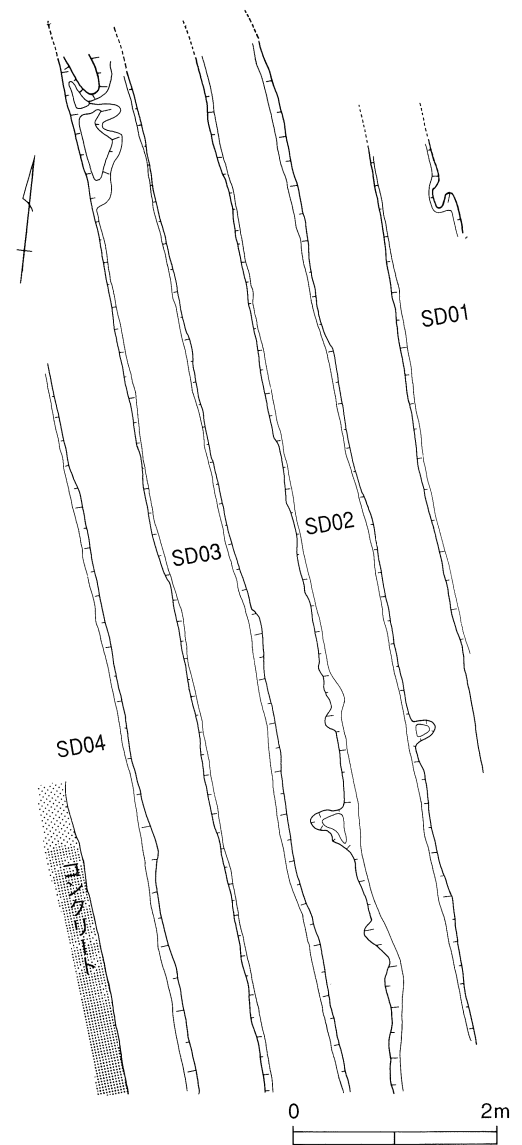
南北ラインその他の遺構 (第7図)

第1遺構面においては、前述したようにSD01～SD04の4条の溝状遺構を検出したのみである。しかし、第2遺構面である灰色砂層上面(北側の一部は明褐色シルト層上面)からは、SD05、SD06の溝状遺構のほかにも、落ち込み状遺構を8、ピット状遺構を15検出している。

SX02は、幅80cm～1.8m、深さ8cm程度、検出長約9mを測り、北北西方向に伸びる不整形の落ち込み状遺構であり、覆土には灰色粘質土が堆積している。

また、P15は幅80cm、深さ15cmを測り、ピット状の遺構の中では最も大きいものであるが、第2遺構面で検出したピット群は、大きさや覆土が相似したものがあるものの柱穴となりうるような配置は認められない。

これらの遺構からの出土遺物は、そのほとんどが小片であるが、須恵器・土師器が出土しており、須恵器は、高広編年ⅢB期にあたるものである。このことから、遺構の性格はよく把握できないが、第2遺構面で検出した遺構は、全て古墳時代終末期に該当するものと考えられる。



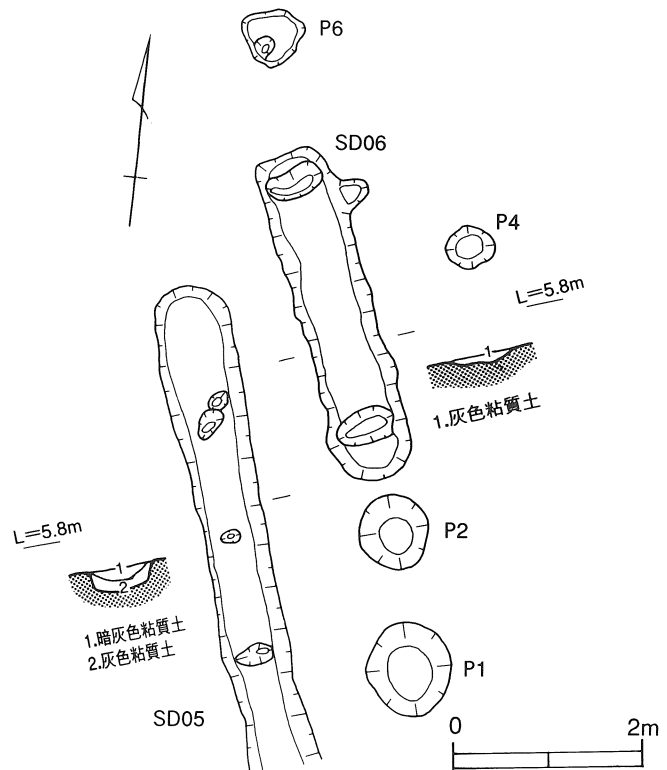
第4図 SD01～SD04 遺構実測図

遺構外の出土遺物（第6図）

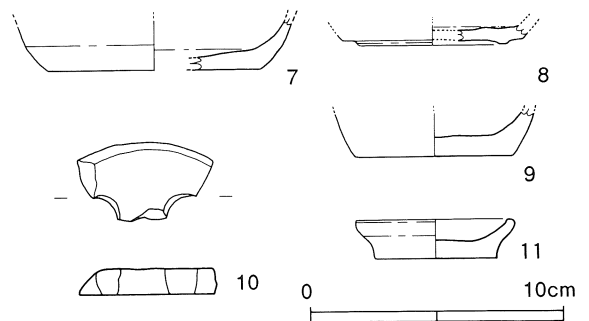
遺構外からの出土遺物も、小片がほとんどであるが、土師器、須恵器、陶器、土製品など、古墳時代後期から近世にかけての遺物が出土している。なお、南北ラインでは、古墳時代以前の土器は全く認められなかった。

遺物7は、やや内湾しながら立ち上がる須恵器の坏である。高広編年ⅣA期の特徴を示しており、底部には回転糸切り痕が認められる。8は、2mm程の高台を有する瀬戸美濃系の陶器皿であり、中世後半期にあたるものと考えられる。9は、底部に糸切り痕を残す土師質の坏で、やや内湾して立ち上がる。11は、土師質の小皿であるが、やや外反しながら立ち上がって、端部はやや内側に向けておさめられている。9・11とも中世の遺物と考えられる。

10は、欠損しているために形状はよくわからないが、円形になるとすれば、径12cmを測るような土製品である。現状では2ヵ所に円形の穴が認められるが、成形が非常に丁寧で焼成も良好なことから、近世のものである可能性が強い。



第5図 南北ライン遺構実測図



第6図 南北ライン遺構外出土遺物実測図

②東西ラインの遺構

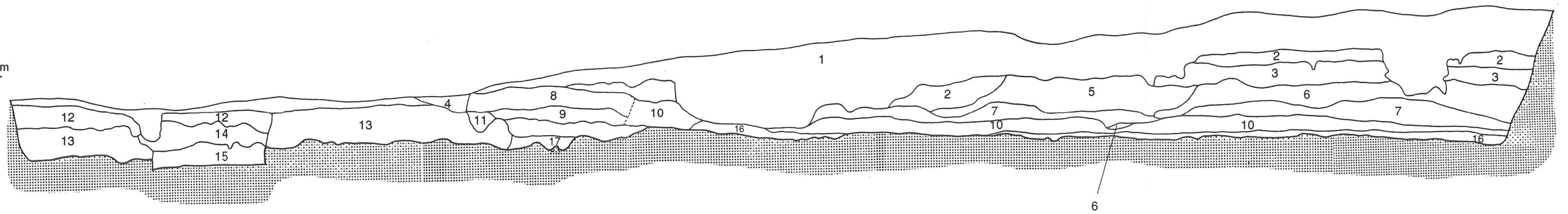
SD07～SD09（第8・9・10図）

東西ラインで検出した3条の溝状遺構である。SD07は南北方向に伸び、SD08とSD09は北北西方向に伸びている。SD07、SD09はそれぞれ調査区の南側でSD08によって切られている。なお、遺構検出面の標高は、4.8m～4.9mの間にあるが、調査区南側の一部にはコンクリートが埋設されており、検出することができなかった。

SD07は、幅約2m、検出長約3m、深さ約30cmを測る溝で、断面は台形を逆さにしたように平らに作り出している。覆土には、粘質土と粘砂が堆積しており、常時水をたたえていたと考えられる。また、切り合い関係によって、SD07はSD08よりも古い時期の溝であることがわかる。

SD08は幅約1.8m、検出長約3.2m、深さ約20cmを測り、調査区の南側で、それぞれSD07、SD09を切っており、3条の溝の中では最も新しい時期の溝である。覆土には、SD07と同様に粘質土と粘砂が堆積しているが、断面形はゆるやかなV字状となる。

L=5.5m

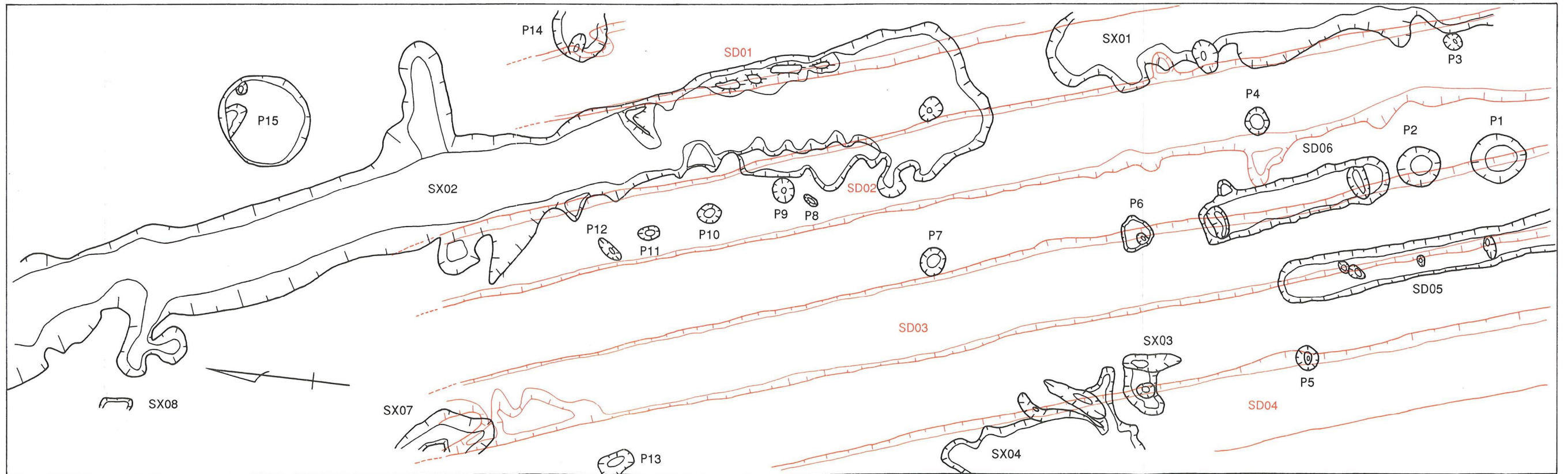


- 1.造成土
- 2.攪乱層
- 3.黒褐色土
- 4.にぶい褐色土
- 5.黄褐色土

- 6.にぶい黄色土
- 7.オリーブ黄色土
- 8.灰黄色土
- 9.暗灰黄色土
- 10.暗灰黄色粘質土

- 11.浅黄色シルト質砂
- 12.燈色シルト
- 13.明褐色シルト
- 14.にぶい褐色シルト
- 15.灰色砂層

- 16.青灰色粘質土
- 17.明褐色シルト質砂



0 2m

第7図 南北ライン遺構配置図

※赤色は第1遺構面の遺構

SD09は、幅約80cm、検出長約3m、深さ約4cmを測る浅い溝で、覆土には粘質土が堆積している。切り合い関係より、SD08より古い時期の遺構であることが明らかである。

遺物は、SD09からは出土していないが、SD07、SD08から、少量ながら弥生土器、土師器が出土している。

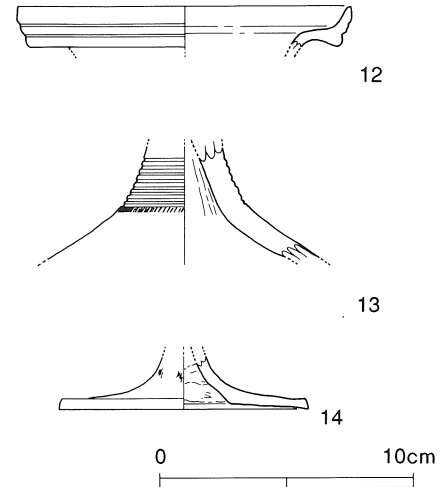
SD07から出土した遺物のうち、12は頸部から外側に屈曲する口縁部をもつ壺形土器で、口縁部に2条の凹線文を施す。その特徴から、弥生時代後期前葉の土器と考えられる。

13は、高坏の脚部であり、10条以上の凹線文と、その下部に刻目文を施しており、弥生時代後期後葉の土器であろう。

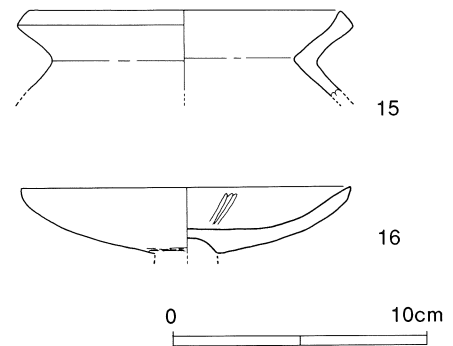
14は、土師器高坏の裾部で、大きく開き、内面にはケズリが認められる。古墳時代前半期のものであろう。

また、SD08から出土した土器のうち、15は、「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ甕で、内面の頸部やや下にはヘラケズリ調整がなされているようであり、弥生時代後期にあたるものであろう。

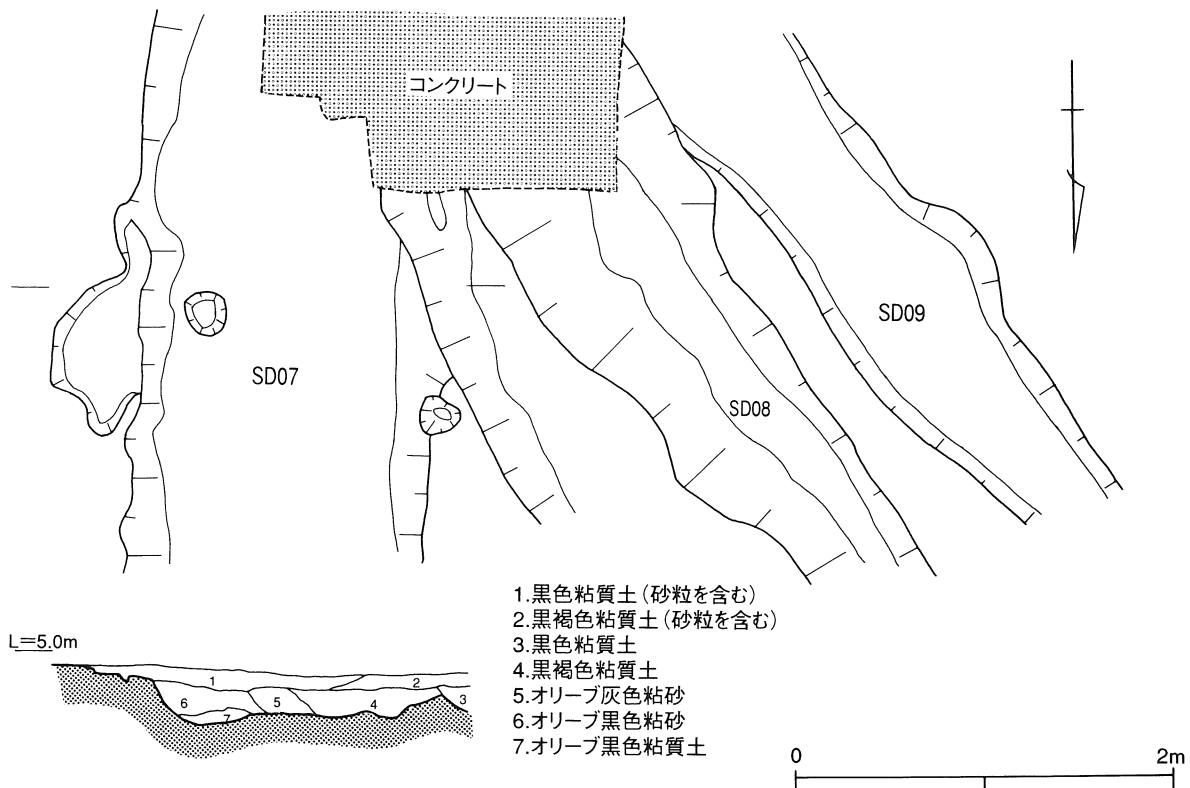
16は、土師器高坏の坏部で、なだらかに立ち上がり、端部を丸くおさめている。風化が著しいが、内面にはミガキ痕が認められ、古墳時代前半期の土器であろう。



第8図 SD07 出土遺物実測図



第9図 SD08 出土遺物実測図



1. 黒色粘質土 (砂粒を含む)
2. 黒褐色粘質土 (砂粒を含む)
3. 黒色粘質土
4. 黒褐色粘質土
5. オリーブ灰色粘砂
6. オリーブ黒色粘砂
7. オリーブ黒色粘質土

第10図 SD07～SD09 遺構実測図

遺物から考えれば、SD07からは弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけての遺物が出土しており、SD08からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土している。これらの遺物は、時期的に重なる部分が大きく、遺構の新旧関係は認められるものの、SD07～SD09は、それほど時間的に差のない時期に築かれたものと考えられる。また、遺構の性格については、粘質土、粘砂が堆積していることから、水路のような施設であったと考えられる。

SD10 (第11・12図)

SD09から東に約9mほど離れた地点で検出した溝状遺構であり、北西方向に伸びている。検出面の標高は、4.8mであり、SD07～SD09の検出面とほぼ一致している。幅は約80cm、検出長約3m、深さ25cmを測り、覆土には粘質土と粘砂が堆積し、断面はレンズ状を呈す。

遺物は少量であるが、17のように複合口縁状につくった脚台部に凹線文を施した弥生時代後期中葉(九重式)の器台が出土している。

遺物と覆土、検出レベルから考えても、SD10はSD07～SD09が築かれた時期とほぼ同時期の遺構であろう。

SD11 (第13・14図)

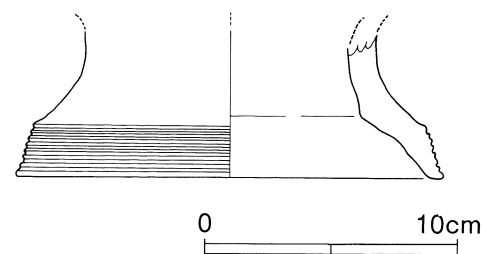
調査区の最も西側で検出した溝状の遺構で、南北方向に伸びている。検出面の標高は、4.8mで、東西ラインに連なるその他の溝状遺構とほぼ一致している。幅は約90cm、検出長約3.3m、深さ約18cmを測る。覆土には粘質土が堆積しており、断面はなだらかなレンズ状を呈す。

SD11からは、遺物は出土しなかったが、SD07～SD11の溝状遺構は、遺物の出土量は少ないものの、検出レベルがほぼ一致しているうえ、遺物の時期についても重なる部分が多いことから、ほぼ同時期に築かれた可能性が強い。

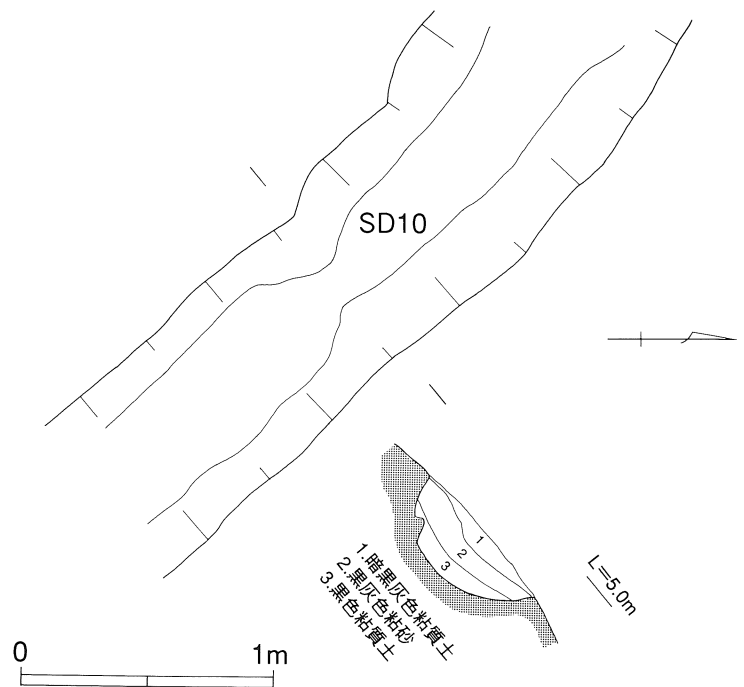
緑灰色砂層出土土器 (第14・15図)

南北ラインの地山である灰色砂層が、東西ラインのSD07より約1m東の地点から落ち込んでいたため、掘り下げていったところ、緑灰色の完全な砂層中から、縄文土器などが出土した。

出土した地点の標高は、約3.6mで、遺構面である緑灰色粘砂層よりも約1mほど低くなっている。遺物18は、内外面とも丁寧に磨かれた浅鉢で、底部は丸底になるものであろう。23も風化が著しい



第11図 SD10 出土遺物実測図



ものの、内外面の一部にはミガキ痕が認められ、同じタイプの土器と考えられる。19は、黒色磨研系の鉢で、外面は研磨されているが、内面には顕著なミガキは認められない。底部から胴部中央のくびれ部にかけては内湾しながら立ち上がり、中央くびれ部から口縁端部にかけては、外反するタイプの土器であろう。21は、口縁端部から1cmほど下に刻目を施した突帯を有す甕である。これらの土器は、その特徴から縄文時代晩期後半のものと考えられる。

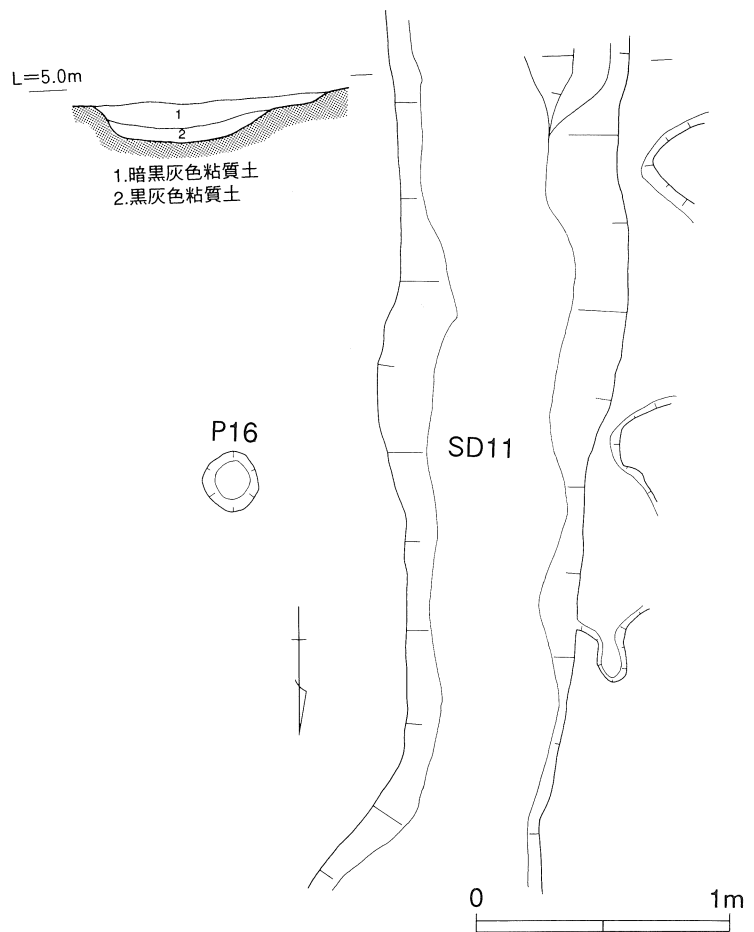
また、22・23は胎土、焼成が似通っており同一個体である可能性が高いが、内面の一部にはケズリのような調整が認められることから、古墳時代の遺物の可能性がある。

なお、これらの遺物が出土した緑灰色砂層はその下層にも堆積しているが、湧水がひどいという、調査区が狭くて危険であるため、これ以上の調査はできなかった。いずれにしても、砂層中からの出土であること、灰色砂層の落ち込みが、さらに西に広がり、深さもあることが予想されることから、旧河道である可能性が強く、流されてきた遺物と考えられる。このことは、善行寺遺跡の南方、1.5kmほど離れた丘陵下にある三田谷遺跡において、大量の縄文時代晩期の土器が出土していること、そして、遺跡のすぐ西には神戸川が流れていることと併せて、非常に興味深い。

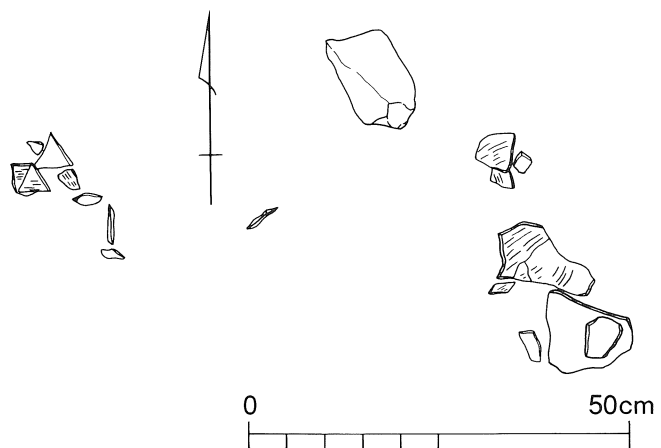
遺構外の出土遺物（第16図）

東西ラインの遺構面である緑灰色粘砂層の上層に堆積している黄灰色粘質土、オリーブ褐色粘質土が遺物包含層となっている。須恵器が最も多く出土しているが、中には弥生土器、土師器、陶器も認められる。しかし、いずれも小片であり、完形に近いものは出土していない。

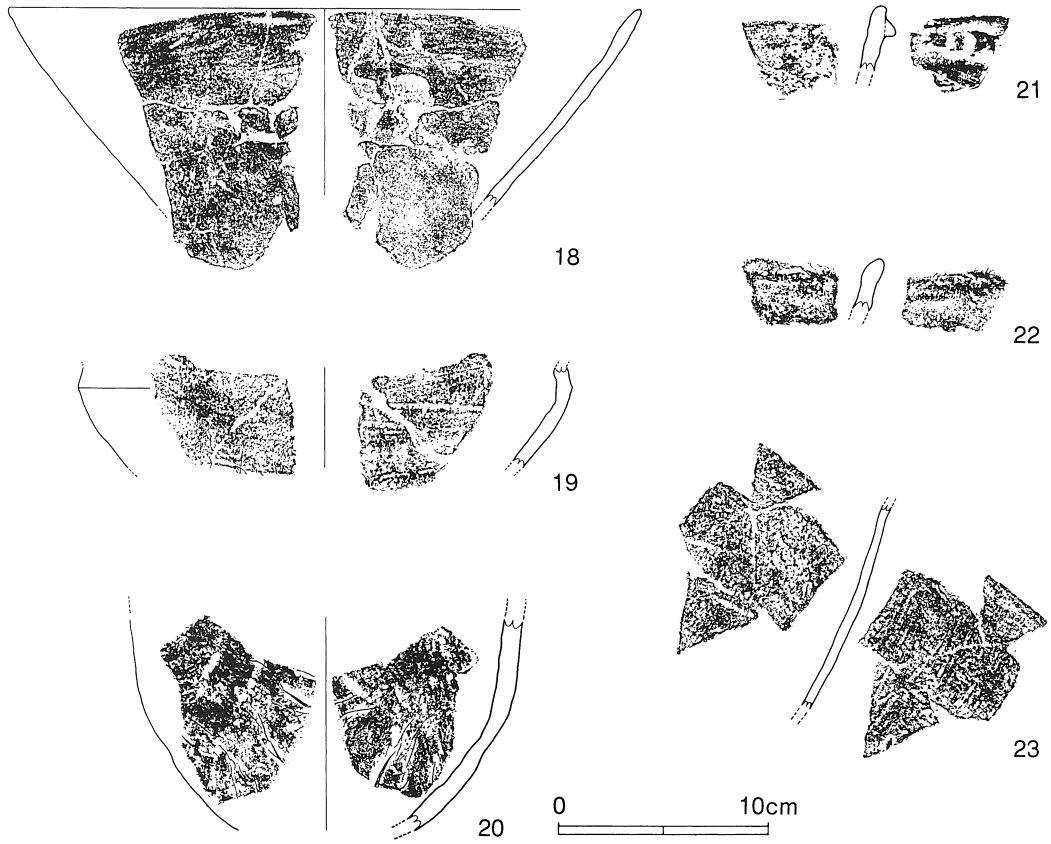
24は、円筒状を呈する頸部から大きく外反する口縁部となり、口縁端部は上下に僅かに拡張する弥生時代後期の壺形土器である。外面口縁部には竹管文と2条の凹線文を施し、頸部には波状文と凹線



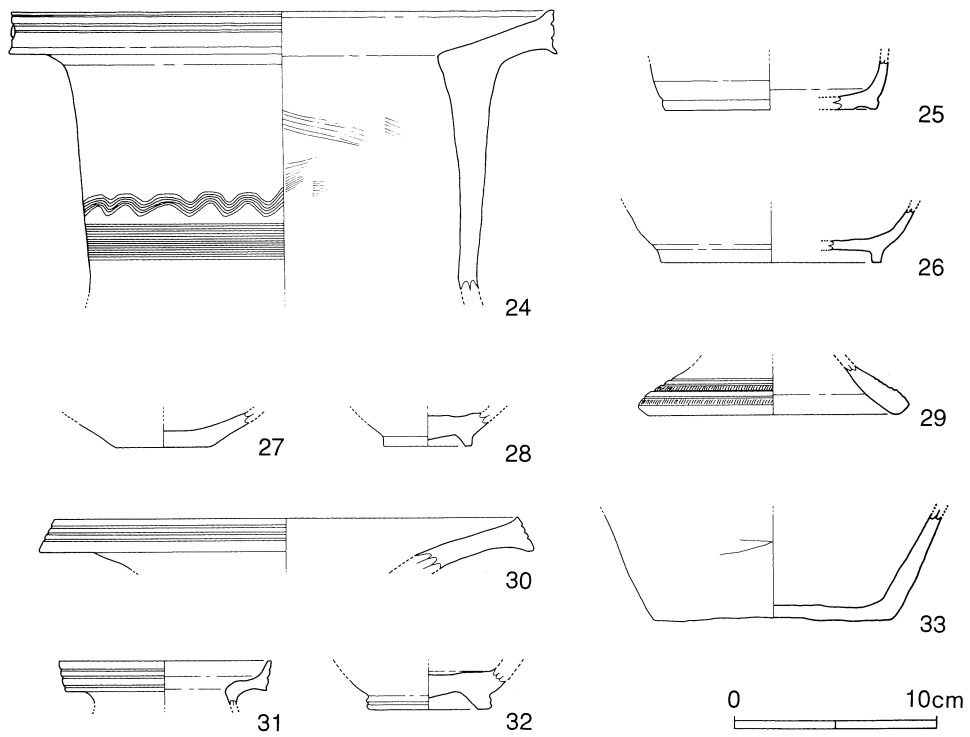
第13図 SD11 遺構実測図



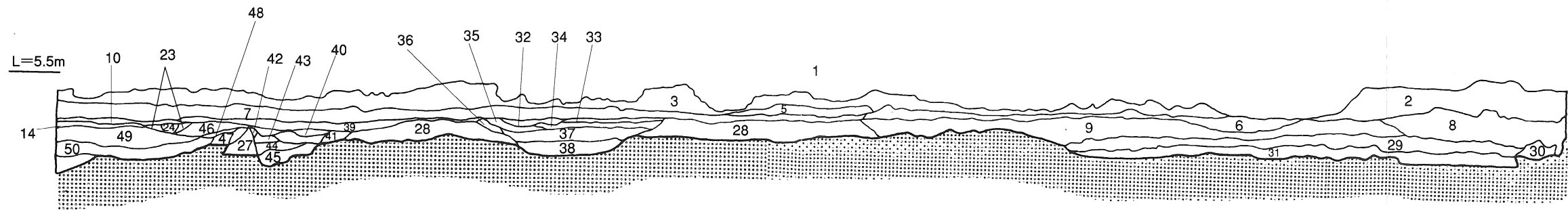
第14図 遺物出土状況（緑灰色砂層）実測図



第15図 緑灰色砂層中遺物実測図

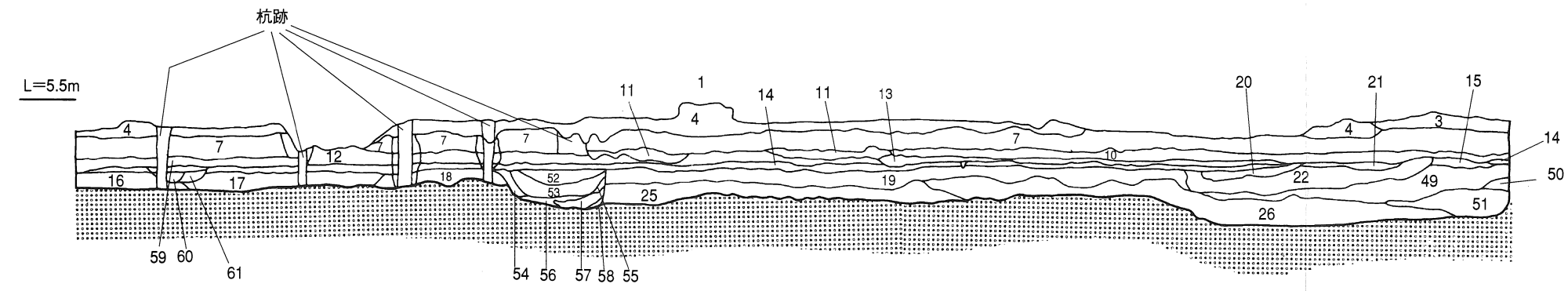
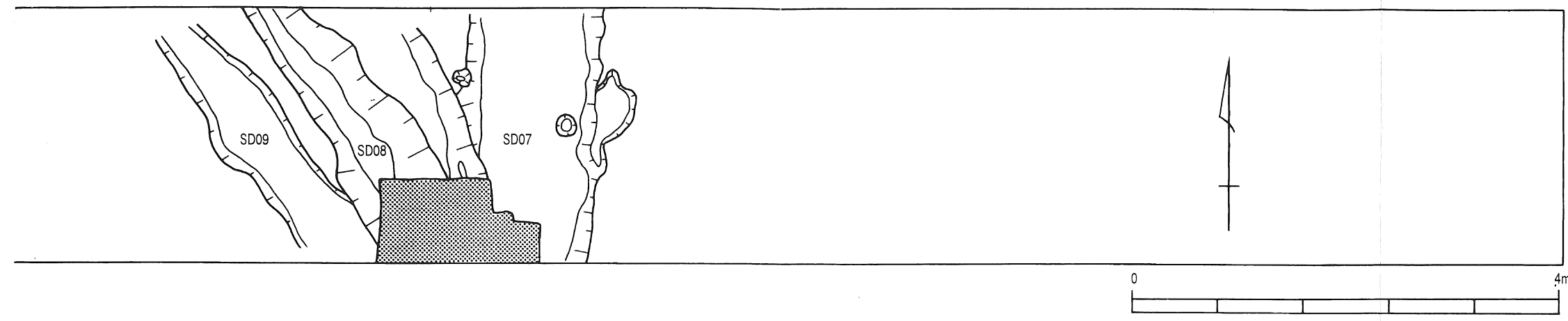


第16図 東西ライン遺構外出土遺物実測図

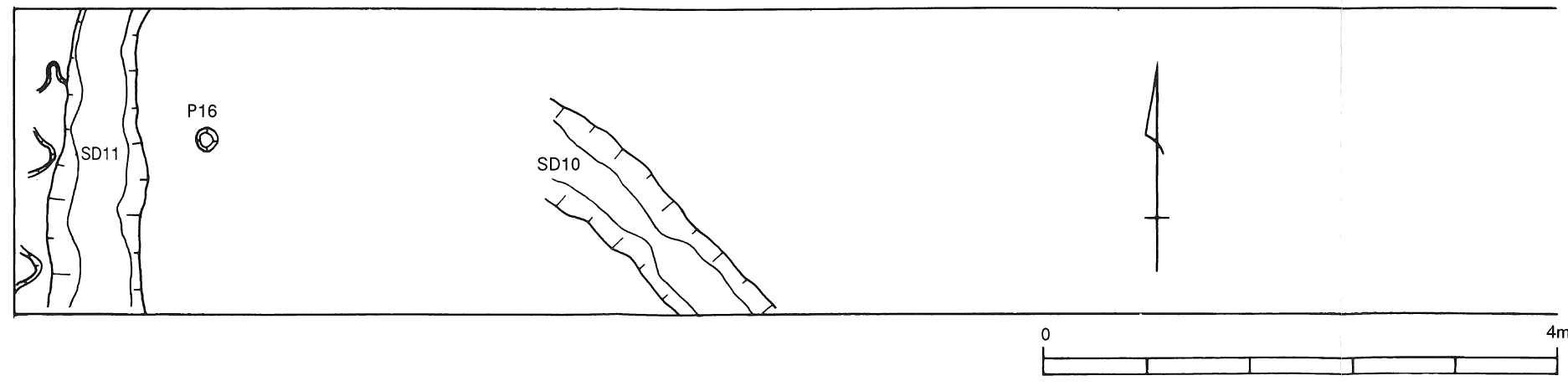


- | | | | |
|--------------|-------------|--------------|-----------|
| SD08 | | SD07 | |
| 39.黄灰色粘質土 | 43.オリブ黒色粘砂層 | 32.暗灰オリブ色土 | 36.暗緑灰色砂層 |
| 40.暗灰色粘質土 | 44.オリブ黒色粘質土 | 33.緑黒色粘質土 | 37.黒色粘砂層 |
| 41.暗オリブ灰色粘質土 | 45.黒色粘質土 | 34.オリブ黒色砂質土 | 38.灰色砂層 |
| 42.黒褐色粘質土 | 46.緑灰色粘質土 | 35.暗オリブ灰色粘質土 | |

- 1.造成土
- 2.燈色シルト層
- 3.灰色土
- 4.暗灰色土
- 5.灰色土
- 6.赤灰色土
- 7.オリブ褐色粘質土
- 8.明褐色シルト層
- 9.浅黄色シルト質砂
- 10.オリブ褐色粘質土
- 11.暗オリブ色粘質土
- 12.黄灰色粘質土
- 13.黄灰色粘質土
- 14.オリブ灰色粘質土
- 15.暗オリブ灰色粘質土
- 16.オリブ黒色粘質土
- 17.オリブ黒色粘砂層
- 18.オリブ灰色粘砂層
- 19.明緑灰色粘砂層
- 20.暗オリブ灰色粘質土
- 21.オリブ灰色粘質土
- 22.暗緑灰色粘質土
- 23.オリブ褐色粘質土
- 24.黒褐色粘質土
- 25.緑灰色粘砂層
- 26.緑灰色粘砂層
- 27.明緑灰色粘砂層
- 28.灰オリブ色砂層
- 29.褐色シルト質砂
- 30.緑灰色粘砂層
- 31.にぶい燈色粘砂層



- | | | | | | |
|-------------|----------|-------------|------------|-------------|--------------|
| SD11 | | SD11 | | SD09 | |
| 59.黒褐色粘質土 | 60.灰色粘質土 | 61.灰オリブ色粘質土 | 52.暗緑灰色粘質土 | 53.暗緑灰色粘質土 | 54.暗オリブ灰色粘質土 |
| | | | 56.暗緑黒色粘質土 | 57.緑黒色粘質土 | 58.緑灰色粘砂層 |
| | | | 55.暗緑灰色粘質土 | 47.緑灰色粘砂質 | 48.明緑灰色粘質土 |
| | | | | 49.緑灰色粘質土 | 50.暗緑灰色粘質土 |
| | | | | 51.緑灰色粘砂層 | |



第17図 東西ライン遺構配置図

文を施している。また、外反する口縁部の内側にも波状文を施している。弥生土器には、そのほか28、30、31がある。28は高坏の脚部であり、凹線文と刻目文が描かれている。30は、頸部からやや外側に屈曲する口縁部をもつ壺形土器である。いずれの弥生土器も、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけてのものと考えられる。

須恵器は、高台を有し、底部から内湾しながら上方の端部に伸びる25や、やや外側に開いて口縁部に達する26など、高広編年ⅣA期からⅣB期にあたるものが多く出土している。33も須恵器壺の底部であるが、平安時代以降のものであろう。

陶器には、28の天目茶碗や、32のように高台を有すものが出土しており、江戸後半期にあたるものと考えられる。

4. ま と め

善行寺遺跡の発掘調査によって、今まで遺跡の存在が知られていなかった地域に遺跡が存在し、人々が生活を営んだ場所であることを示す遺構や遺物を検出し、貴重な資料を得ることができた。

調査区の南北ラインでは、溝状遺構、落ち込み状遺構、ピットなどを検出しておおよそ古墳時代後期から奈良時代にかけて生活の場となっていたことが窺われる。

一方、東西ラインにおいては、水路として利用されていたと考えられる溝状遺構が検出され、出土遺物から、おおよそ弥生時代後期頃に築かれた可能性が強い。

また、灰色砂層の落ち込みを追って掘り下げた旧河道と考えられる緑灰色砂層から、縄文時代晩期後半頃の土器が検出された。縄文時代の土器が平野中央部で発見されたことは、現在のところ矢野町にある矢野遺跡で少量の土器片が発見されているにすぎず、流されてきた遺物と考えられるものではあるが、貴重な資料となった。

なお、平成8年度に発掘調査を実施し、善行寺遺跡の北東約100mのところ広がる藤ヶ森遺跡（第Ⅱ地点）でも弥生時代後期の遺物が中心に出土しており、善行寺遺跡の東西ラインの溝状遺構の時期に対応する。

このことより、弥生時代後期頃に人々の生活の場であった遺跡の範囲が、さらに北東に広がっていたことが予想される。

圖 版



1-1 善行寺遺跡近景（東から）



1-2 SD01～SD04 検出状況



1-3 南北ライン遺構検出状況（第2遺構面）



2-1 SD07~SD09 検出状況

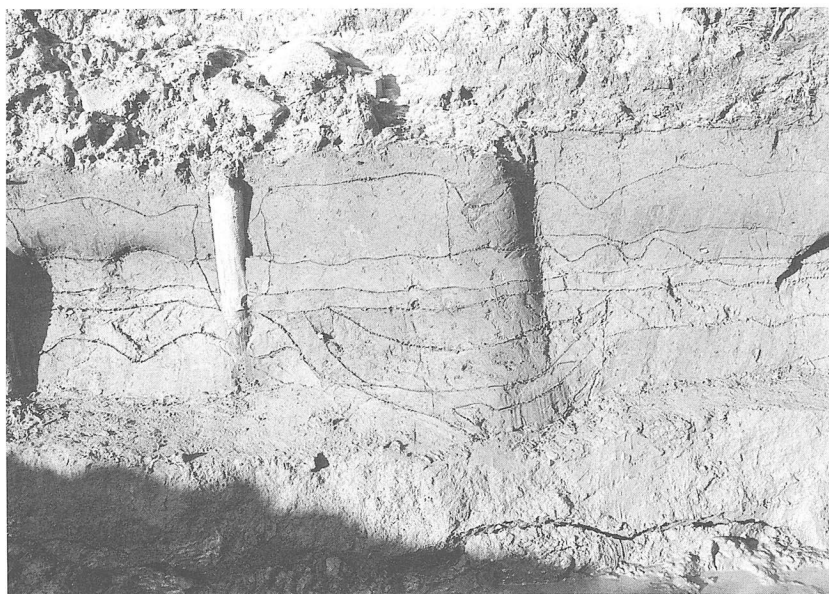


2-2 SD10 検出状況



2-3 SD11 検出状況

3-1 東西ライン堆積土状況
(SD10の落込み)

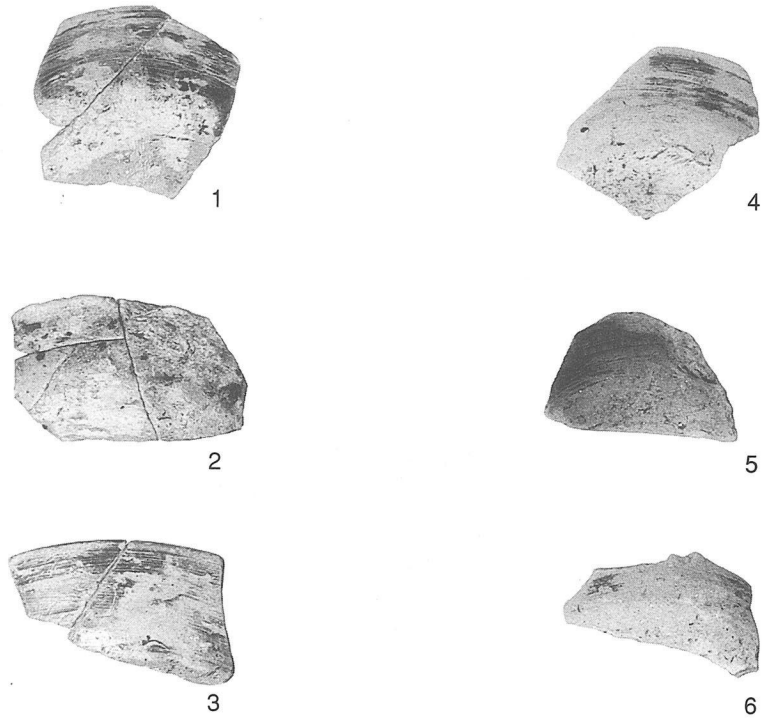


3-2 縄文土器等出土状況

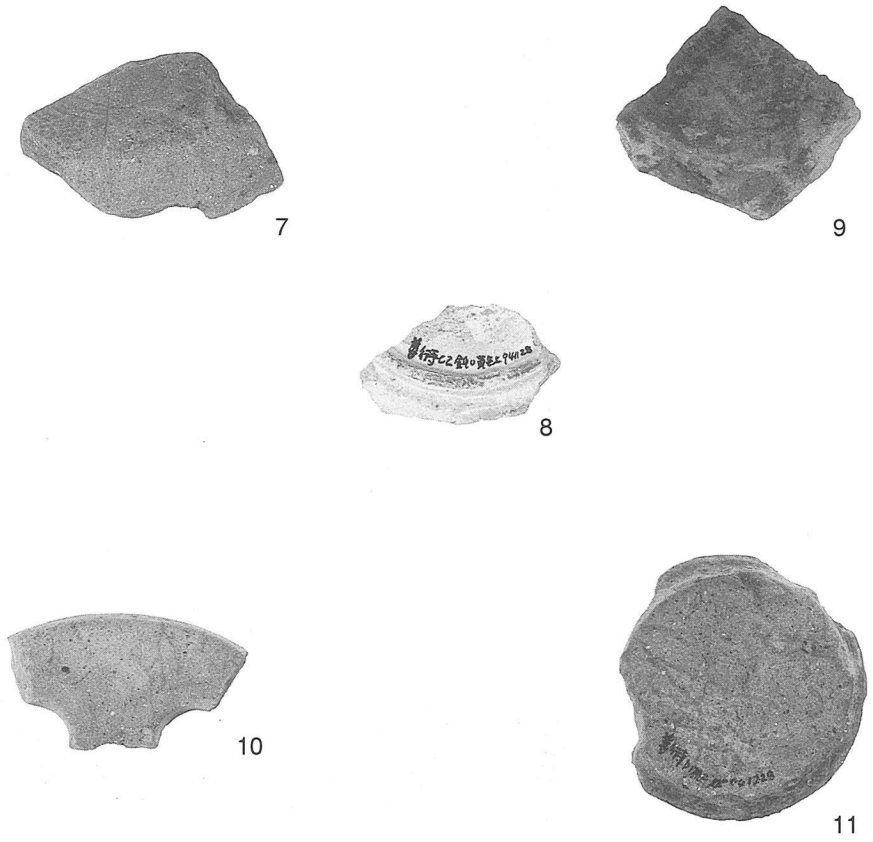


3-3 発掘調査作業員のみなさん

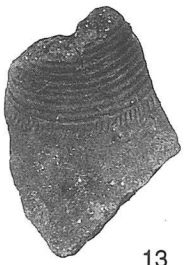




4-1 SD02 出土遺物



4-2 南北ライン遺構外出土遺物



13



14



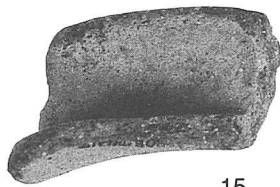
12



17

5-1 SD07 出土遺物

5-3 SD10 出土遺物



15

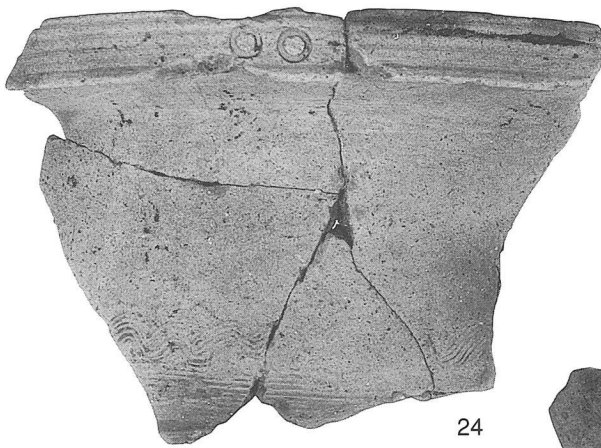


16

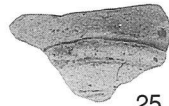


33

5-2 SD08 出土遺物



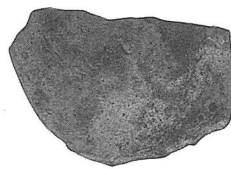
24



25



26



27



28



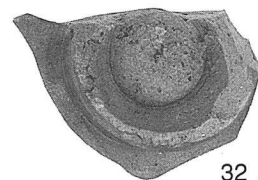
30



31

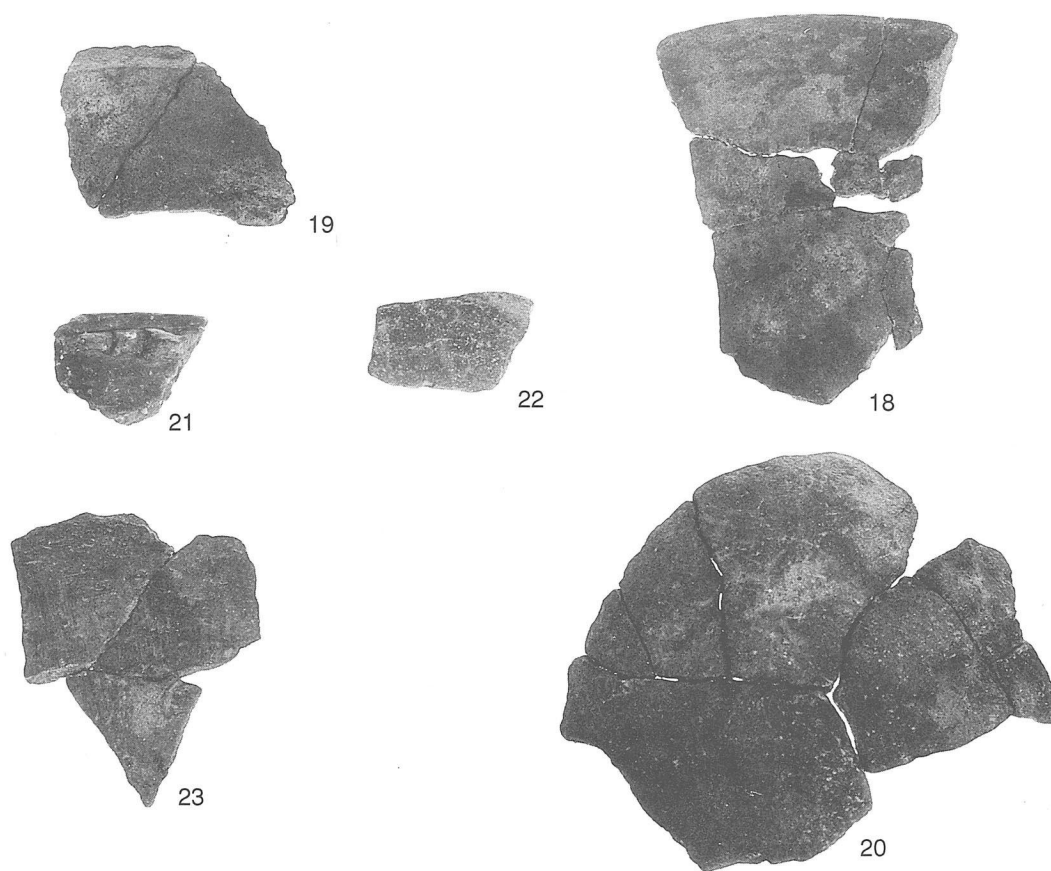


29



32

5-5 東西ライン遺構外出土遺物



6-1 綠灰色砂層出土土器

地藏堂横穴墓群（第3支群）

1. 調査に至る経緯と遺跡の概要

調査に至る経緯

平成8年4月、出雲市教育委員会に土地所有者である高見清春氏より、土地造成工事中に横穴墓を発見したとの通報があった。その通報を受け出雲市教育委員会が現地を訪れたところ、重機によって天井部が掘削された状況であったが玄室内に須恵器坏蓋1点、須恵器坏身1点を確認することができた。この工事は幸いにもこの時点で終了するということがあったが、天井部も大きく欠損している状況等考慮した結果、緊急な調査が必要であると判断し出雲市教育委員会において発掘調査を行うこととなった。調査後は埋め戻した上、現状で保存した。

遺跡の概要

地蔵堂横穴墓群は神戸川左岸の南側の小丘陵に築造されている。従来より第1支群10基、第2支群3基が知られている。今回発見された横穴墓はこれらの東側に隣接し、かつては同一丘陵に位置していたと考えられるため、地蔵堂横穴墓第3支群1号穴と呼称する。

第1支群

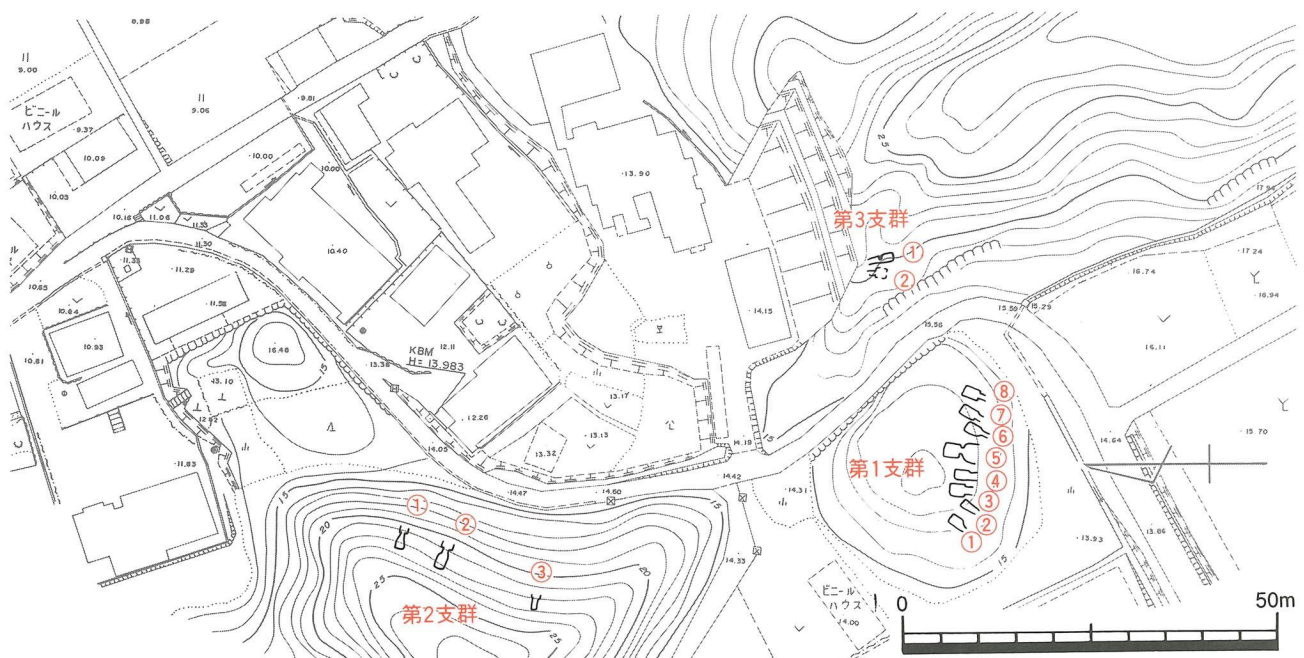
第1支群は以前より開口しており、10基のうち8基が池田満雄氏によって聞き取り調査されている。⁽¹⁾ 出土遺物としては、どの横穴墓からどの遺物が出土したのかはわからないが、須恵器坏蓋、須恵器坏身、鉄刀、用途不明鉄器が知られている。現在は5基が開口しており、残りは埋没している。

第2支群

平成3・4年度に出雲市教育委員会により調査を行った。⁽²⁾ 1号穴は礫床を持ち、人骨及び坏蓋、坏身、直口壺、甗（以上須恵器）、玉類が出土した。2号穴は須恵器床を持ち、須恵器坏蓋、須恵器坏身、耳環、玉類を出土している。また、3号穴は未完成横穴墓である。

(1)池田 満雄 『出雲市の文化財 一出雲市文化財調査報告第二集一』1960 出雲市教育委員会

(2)松山 智弘 『地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書』1994 出雲市教育委員会



第1図 地蔵堂横穴墓群 横穴墓配置図 (Scale=1/1,000)

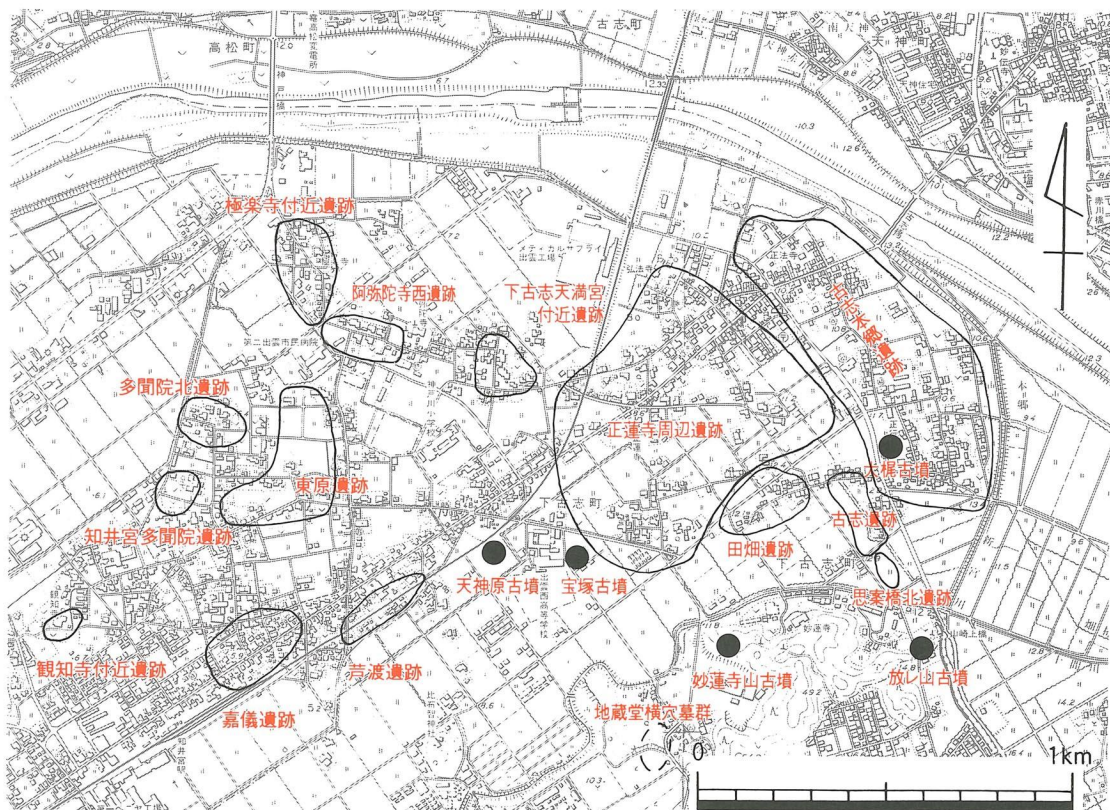
2. 位置と環境

地蔵堂横穴墓群の立地する地域は出雲平野の南西、神戸川左岸に位置する。この地域は北側を神戸川南側を丘陵に挟まれた狭い沖積平野でありながら出雲平野のなかでも有数の遺跡密集地である。この地域の歴史的環境について概観しておきたい。

神戸川の左岸において、旧石器時代、縄文時代の遺跡は知られていない。出雲平野全体を視野に入れるなら、縄文時代早期末の菱根遺跡・上長浜貝塚遺跡が最も古い遺跡である。その後出雲平野では、縄文時代後期から晩期にかけて菱根遺跡周辺に原山遺跡、大社境内遺跡が出現する。これらと同じ時期に出雲平野中央に矢野遺跡が、南に三田谷遺跡が出現し、出土遺物は少ないものの平野に広がっていく。

弥生時代前期には、矢野遺跡、原山遺跡、大社境内遺跡が引き続き営まれる。しかし、まだ集落の立地する場所は限られており、出雲平野全体に多く出現するようになるには、弥生時代中期を待たなければならない。

そのきっかけとなるのは、斐伊川、神戸川による自然堤防の形成である。神戸川左岸の自然堤防は、東西方向に3列形成されているが、そのうちの1列は古志町本郷から知井宮町にかけて広がっている。弥生時代中期になり、この自然堤防上に正蓮寺周辺遺跡、古志本郷遺跡、田畑遺跡、知井宮多聞院遺跡といった集落が営まれるようになる。また、神戸川右岸においても天神遺跡が出現するなど、出雲平野全体に集落が形成されるようになっていく。そして正蓮寺周辺遺跡、天神遺跡は環濠を持ち、これらに古志本郷遺跡を加えた大集落の出現はこの時期に人口の飛躍的増加があったことを窺わせよう。



第2図 地蔵堂横穴墓群周辺遺跡分布図 (Scale=1/20,000)

古墳時代に入ると、古墳時代の集落はよくわかっていないが、集落の形成、継続を背景として古墳、横穴墓が築造されたと考えられる。まず、この地域には前期古墳である山地古墳、北光寺古墳といった首長墓が丘陵上に築造されるが、中期になると丁之内古墳、浅柄古墳、間谷古墳群などの小規模古墳は存在するものの、首長墓と考えられるような古墳は知られていない。しかし、後期に入ると神戸川の右岸で今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳、地蔵山古墳といった首長墓の出現が見られ、古墳文化が盛行する。これと時期を同じくして、左岸のこの地域においても南側丘陵に妙蓮寺山古墳、放レ山古墳が、平野部には宝塚古墳が築造される。また、神戸川が平野部に流れ出た直後の丘陵では42基からなる刈山古墳群が形成される。

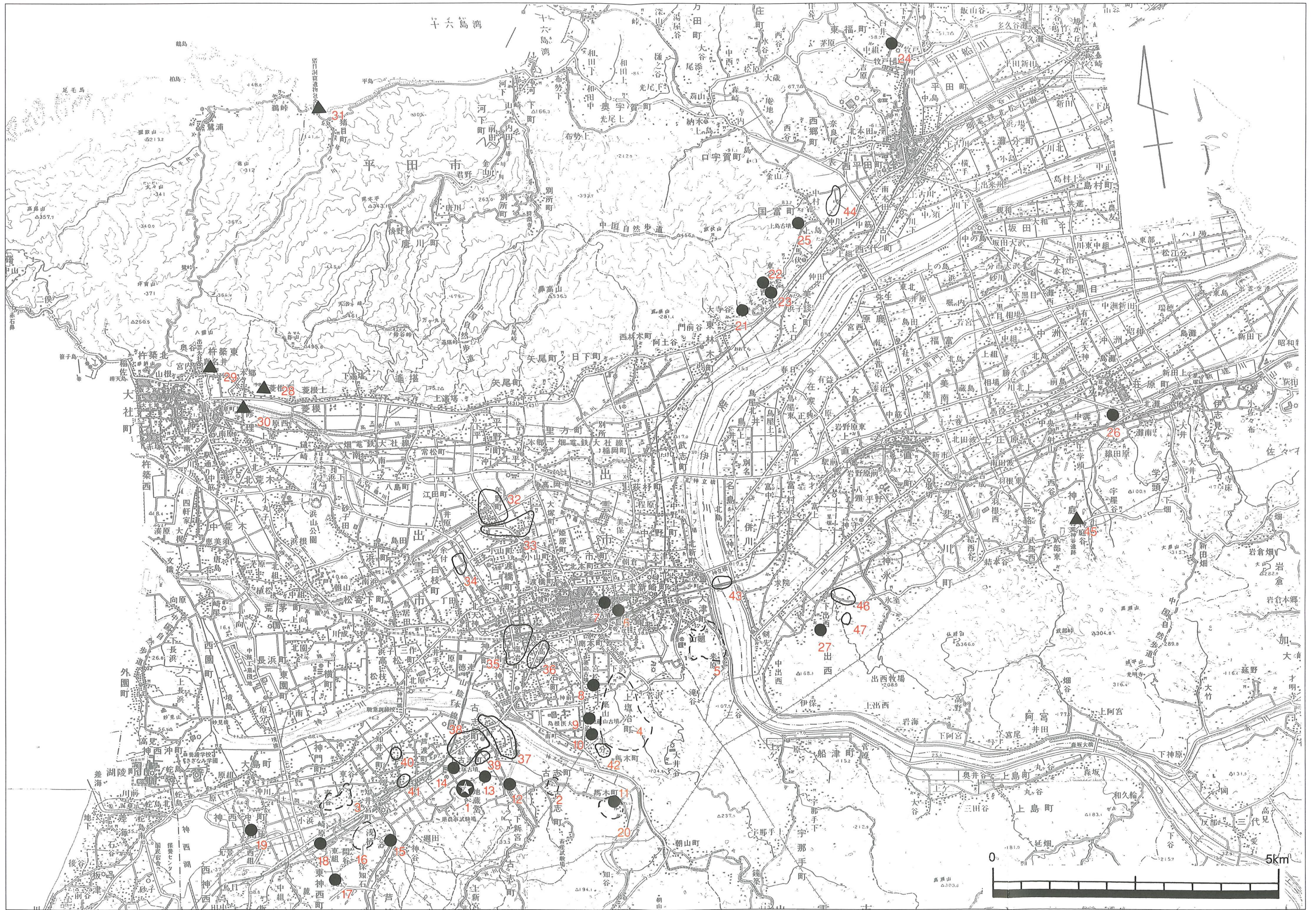
この頃横穴墓も多く造られるようになる。地蔵堂横穴墓群をはじめとして、井上横穴墓群、深田谷横穴墓群、更に100基以上が確認されている神門横穴墓群もこの地域に形成される。横穴墓群はこの地域だけではなく、神戸川右岸には大横穴墓群の一つである上塩冶横穴墓群が造られる。この他にも出雲平野の各地に横穴墓群が形成されるようになる。

参考文献

- 池田 満雄『出雲市の文化財 一出雲市文化財調査報告第二集一』1960 出雲市教育委員会
島根県教育委員会他『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財発掘調査報告書』1980
建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 川上 稔『塩冶地区遺跡分布調査II』1987 出雲市教育委員会
- 田中 義昭・西尾 克己「出雲平野における原始・古代集落の分布について」
（『山陰地域研究第4号』島根大学山陰地域研究総合センター）1988
- 川上 稔『古志地区遺跡分布調査報告書』1988 出雲市教育委員会
- 川上 稔『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989 出雲市教育委員会
- 西尾 克己・大國 晴雄『出雲平野の古墳』1991 出雲市教育委員会
- 松山 智弘『四絡地区遺跡発掘調査報告書』1992 出雲市教育委員会
- 松山 智弘『地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書』1994 出雲市教育委員会

1	地藏堂横穴墓群	26	神庭岩船山古墳
2	井上横穴墓群	27	出西小丸古墳
3	神門横穴墓群	28	菱根遺跡
4	上塩冶横穴墓群	29	出雲大社境内遺跡
5	西谷墳墓群	30	原山遺跡
6	今市大念寺古墳	31	猪目洞窟遺物包含層
7	塚山古墳	32	矢野遺跡
8	上塩冶築山古墳	33	小山遺跡
9	地藏山古墳	34	白枝荒神遺跡
10	半分古墳	35	天神遺跡
11	小坂古墳	36	高西遺跡
12	放レ山古墳	37	古志本郷遺跡
13	妙蓮寺山古墳	38	正蓮寺周辺遺跡
14	宝塚古墳	39	田畑遺跡
15	浅柄古墳	40	知井宮多聞院遺跡
16	間谷古墳群	41	嘉儀遺跡
17	北光寺古墳	42	三田谷遺跡
18	丁之内古墳	43	斐伊川鉄橋遺跡
19	山地古墳	44	源代遺跡
20	刈山古墳群	45	荒神谷遺跡
21	大寺古墳	46	後谷遺跡
22	美談神社 1 号墳	47	長者原（郡家）推定地
23	美談神社 2 号墳		
24	山崎古墳		
25	上島古墳		

表 1 出雲平野主要遺跡名表



第3図 出雲平野主要遺跡分布図 (Scale=1/60,000)

3. 発掘調査の概要

地藏堂横穴墓第3支群1号穴は、軟質な凝灰質砂岩を利用して築造された小さな横穴墓である。その天井部は工事によって掘削されていた。

遺構（第4図）

玄室

玄室の平面プランは長さ1.24m、奥壁部分での幅0.97m、玄門付近での幅0.78mの台形を呈する。また、玄門部分では左側で袖を作り出す一方で右側では玄室からそのまま羨道へと移行していく。ただし、右側については側壁の調整の違いより玄室と羨道を区別することができる。（図版4-2）横断面形は、重機の掘削によって天井部が欠損しているものの、側壁の軒線が認められないことと奥壁の形状からアーチ形を呈すると考えられる。

床面には2～3cm大の石を用いて礫床が敷かれていた。しかし、この礫床は床面に直接敷かれているわけではなく、あいだに1～2cmの厚さの土をかんでいる。玄室の床面には、多くの深い工具痕が認められ、側壁のように丁寧な調整を施していない。この土は、床面に調整を施す代わりに土を敷いて平らにしたものであろう。

羨道

長さ0.66m、羨門部分での幅0.45m、玄門部分での幅0.59mを測る。天井部は崩落が激しく高さは不明だが、最大高は0.6m前後だと推定できる。壁面と床面の界線は明瞭であり、断面形は方形を呈する。床面中央には排水用と考えられる幅0.12m程度の溝が設けられており、前庭にまで抜けていく。

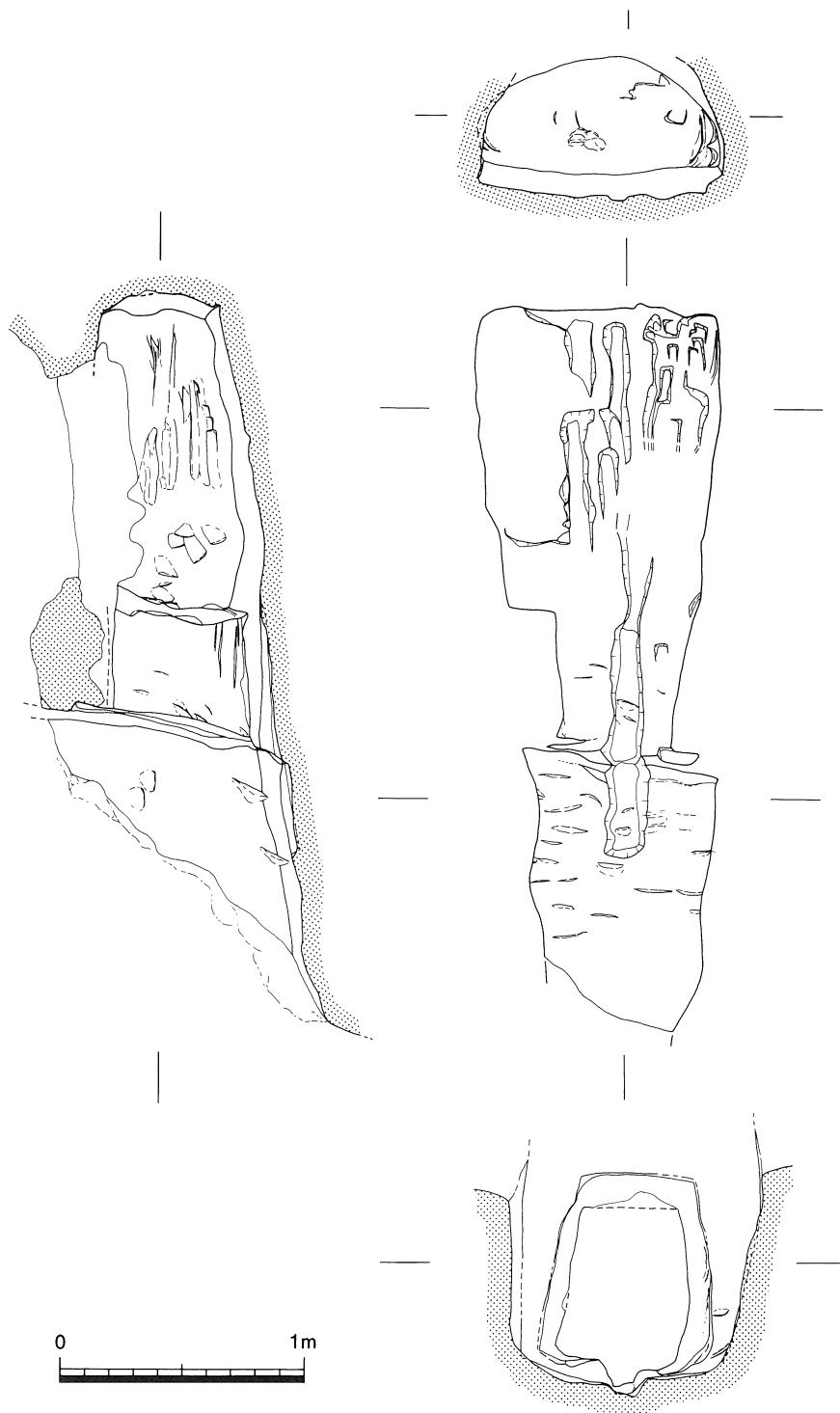
前庭・羨門

前庭は長さ1.16m、最大幅0.81mを測る。羨道と違い壁面と床面の界線は不明瞭で、断面形はU形を呈する。床面中央には羨道より続く溝が、羨門より0.45mの場所まで延びている。また、羨門には深さ3cm、幅6～13cmの削り込みが設けられている。これは通常、閉塞板を受けるための施設であるが、この横穴墓においては閉塞板を使用した形跡はない。

閉塞施設（第5図・図版2）

羨道及び前庭奥は人頭大の石を積み上げて嚴重に閉塞されていた。羨道においては、床面に接し下側が平らで羨道全面を覆うほどの大きさの石が置かれているが、前庭においては石が床面に接しておらず、それ以下に1層土層が認められる（第8層）。このことから一度開口した後に再度閉塞をした可能性も考えられるが、その根拠となる状況は検出できなかった。

これらの閉塞石は以下のような順序で閉塞されたと考えられる。まず、羨道高の4分の3程の位置まで積み上げる。その後前庭の同じ高さにまで石を積み、(A)を羨道の開いている部分に入れ込む。最後に(A)の上に石を積み上げる。（図版2-2）



第4図 地藏堂横穴墓第3支群1号穴 遺構実測図 (Scale=1/30)



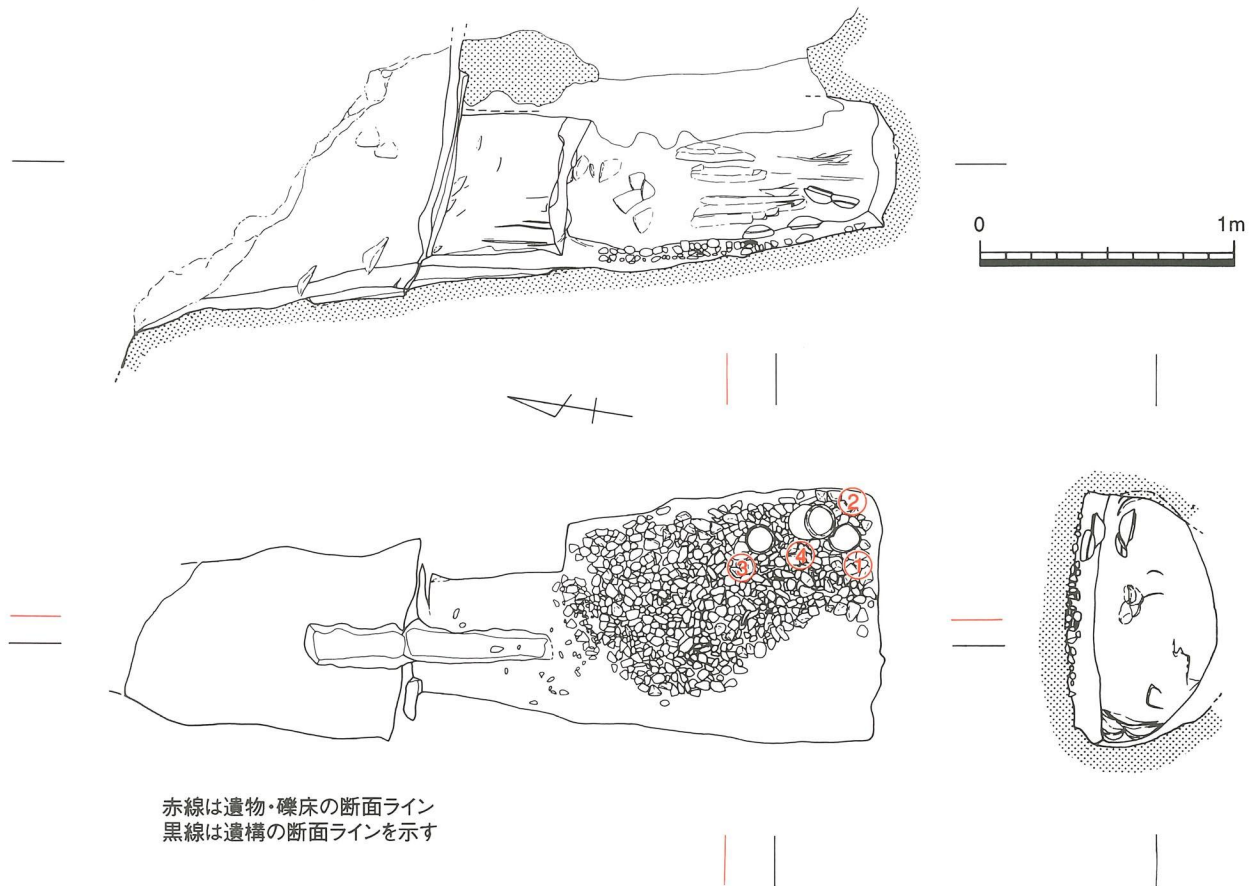
- | | |
|-----------------------|--------------------|
| ① 淡黒褐色土 (腐植土) | ⑤ 黄褐色土 (礫を多く含む) |
| ② 黄褐色土 (礫を多く含む) | ⑥ 黄褐色土 (礫を若干含む) |
| ③ 暗黄褐色土 | ⑦ 黄褐色土 (礫を多く含む) |
| ④ やや暗い黄褐色土 (よくしまっている) | ⑧ 淡黄褐色土 (よくしまっている) |

第5図 埋土堆積・閉塞状況図 (Scale=1/30)

遺物

出土状況（第6図）

遺物は坏蓋2点、坏身2点が出土しているが全て玄室よりの出土である。調査前においては玄室左奥の流入土上に坏蓋1点（①）坏身1点（②）を確認していた。この流入土を除去すると、更にこの下より礫床に接した状態で坏蓋、坏身ともに1点ずつ（③・④）出土した。また同様に礫床に接し坏蓋の破片（⑤）を検出したが、これは流入土上の坏蓋（①）の一部である。

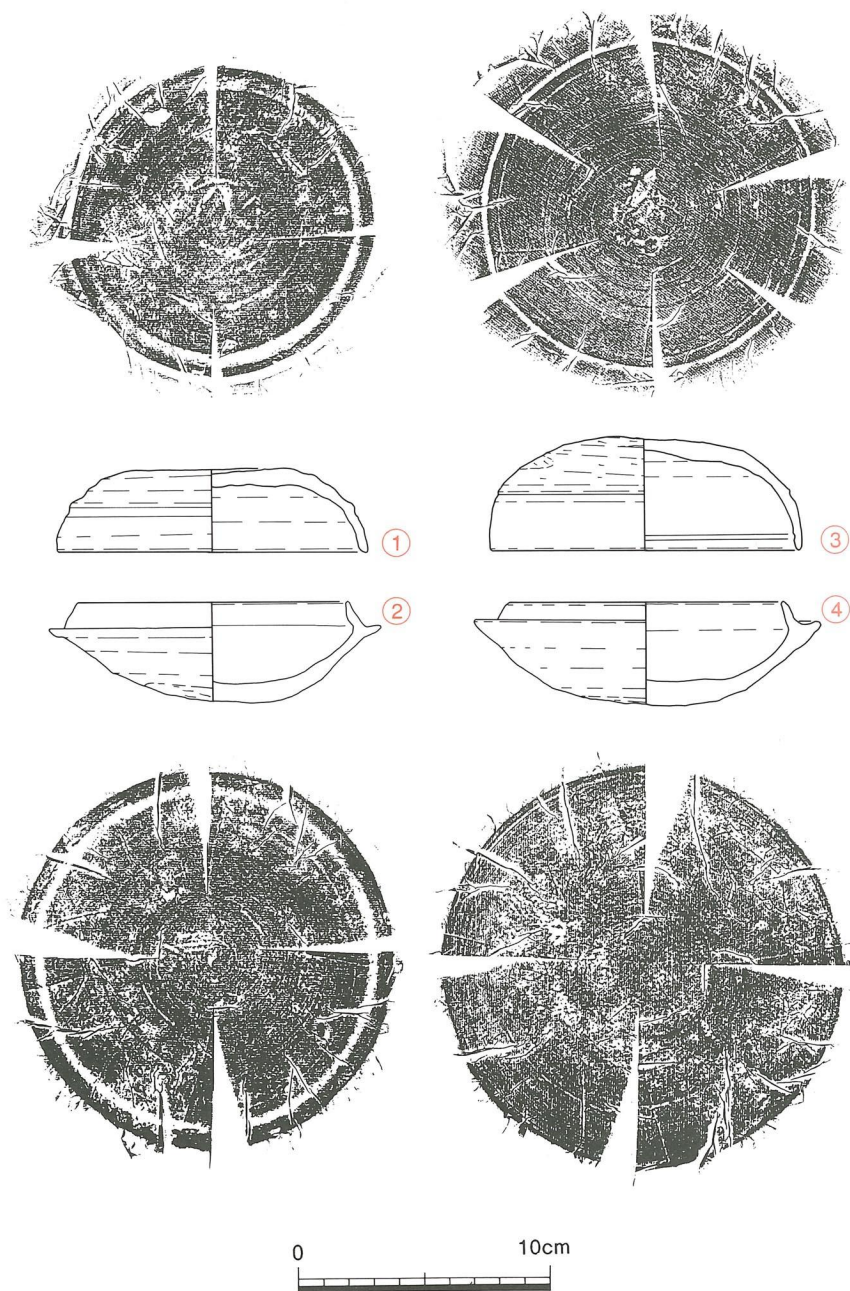


第6図 遺物・礫床出土状況図 (Scale=1/30)

須恵器（第7図）

①・③は須恵器坏蓋である。①は器高が低く、肩部に一条の沈線を持つ。口縁はかなり外へ広がり端部は肥厚する。頂部はヘラ切りであるが、へこんでいる。③は①に比べ全体的に薄手であり、器高も比較的高い。肩部外面と口縁部内面にそれぞれ一条の沈線を持つ。口縁はほぼ直立する。頂部から肩部まではヘラケズリを施し、頂部はヘラ切りの後、押さえる。①・③の両方とも山本編年Ⅲ期に該当するが③の方が比較的古い要素を残している。

②・④は須恵器坏身である。②の口縁部は内傾し、端部は鋭い。受け部は外方へはっきりと広がっている。丁寧なヘラケズリを体部下半に施している。④は②に比べ大きい。受け部は外方へ広げる意図はあるようであるがはっきりせず、なだらかである。ヘラケズリは体部下1/3に施している。



第7図 第3支群1号穴 出土遺物実測図 (Scale=1/3)

4. ま と め

第3支群1号穴で特徴的なのは人頭大の石を多く利用した閉塞施設の存在である。礫床を敷いた後、まず羨道部を覆う大きさの平たい石を置き、それから人頭大の石を積み上げている。この横穴墓には本来閉塞板を受けるための割り込みが設けられているが、多くの閉塞石が羨道と前庭にまたがる場所に積まれている状況からみても閉塞板を設置していたとは考え難い。

また、この横穴墓は、玄室長1.24mと成人を被葬者として考えるにはあまりにも小さいため、被葬者は小児であると考えられよう。横穴墓の時期は出土遺物より山本編年⁽¹⁾Ⅲ期と考えられる。また、出土遺物は山本Ⅲ期を細分した大谷編年⁽²⁾においては①②がA4形式、③④がA5形式を示し、出雲5期と考えられる。

これまで知られている地蔵堂横穴墓群の須恵器も山本編年Ⅲ期の様相を示しているものが多い。出雲平野においては、山本編年Ⅲ期の須恵器を出土する横穴墓は少なく、出雲平野における初期横穴墓の様々な問題を解明するには至らない。しかし、これらの問題を考える上での貴重な資料を追加したことに今回の調査の意味があるだろう。

今回調査した横穴墓は、第1支群、第2支群のどちらの開口方向とも違っていることから、どちらかの支群に含まれる可能性は少ないと思われる。このことからこの横穴墓を第3支群とし、現在2基を確認している。横穴墓は群をなすことが多く、これから新たな横穴墓が発見される可能性は十分ある。これまでの地蔵堂横穴墓群を考えると、新たに発見される横穴墓は山本Ⅲ期である可能性が強いだろう。しかし南側については、平成3・4年度に実施した第2支群の調査の際に試掘を行っているが遺構は確認されていない。発見の可能性があるとすれば東側斜面であり、更なるⅢ期横穴墓の資料増加を期待したい。

(1)山本 清「山陰の須恵器」(『島根大学開学10周年記念論文集』 1960)

(2)大谷 晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」(『島根考古学会誌第11号』 1994) 島根考古学会

圖 版



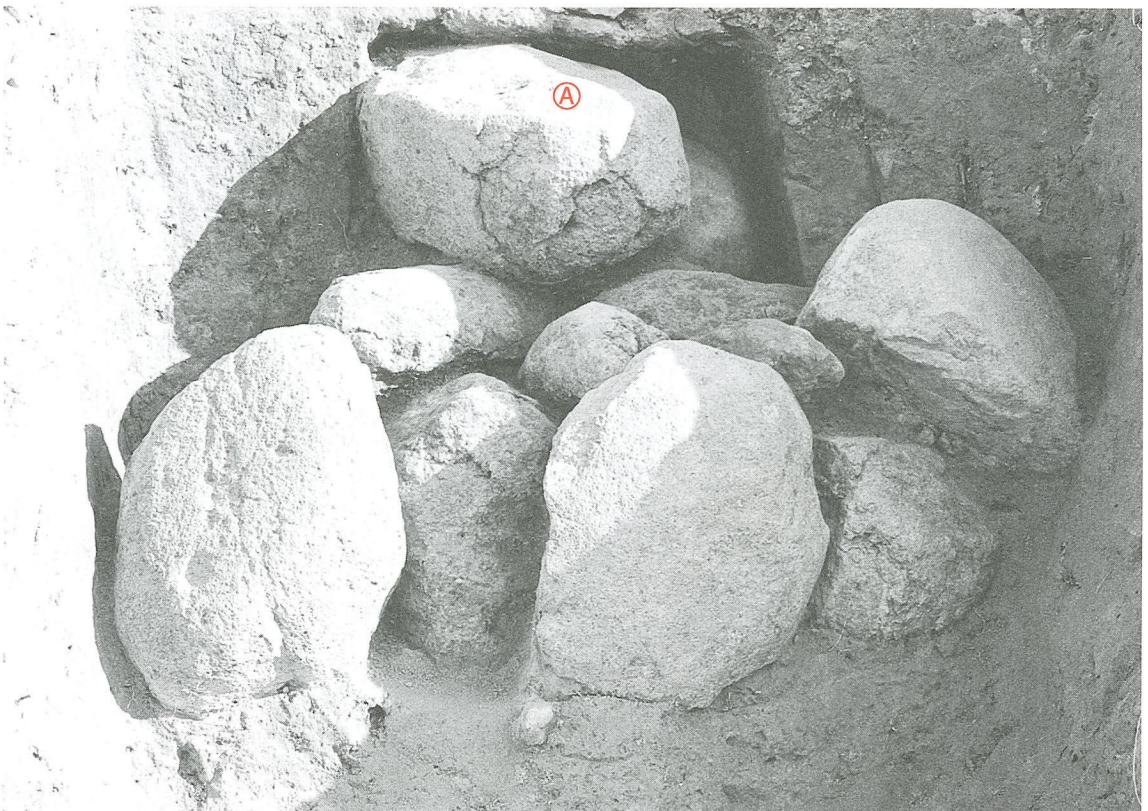
1-1 調査前



1-2 前庭部埋土堆積状況



2-1 閉塞状況(1)



2-2 閉塞状況(2) 上部閉塞石除去後



3-1 礫床検出状況



3-2 遺物出土状況(1)



3-3 遺物出土状況(2)
流入土除去後



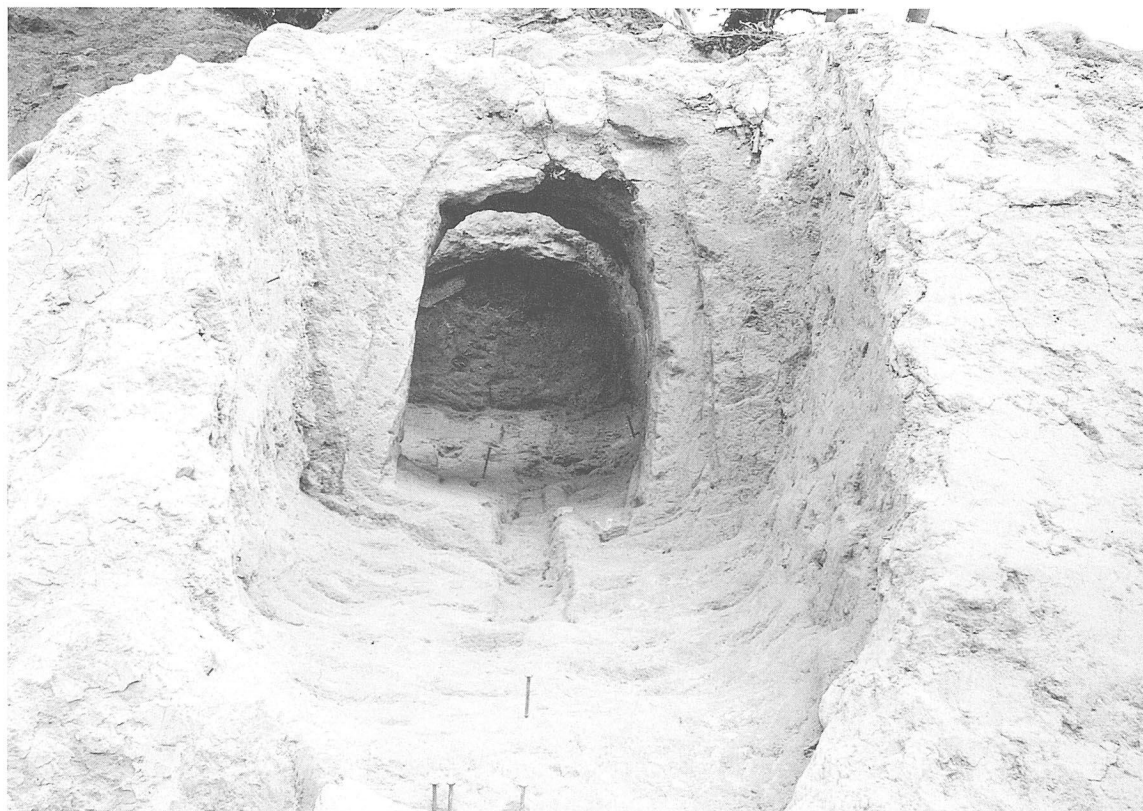
4-1 奥壁



4-2 西側側壁
玄室・羨道の境
(右側が羨道)



4-3 東側側壁



5-1 完掘状況(1) 正面より



5-2 完掘状況(2) 上より



6-1 第3支群1号穴出土遺物



6-2 第3支群1号穴遠景 第2支群より

平成9年(1997)3月17日 印刷

平成9年(1997)3月20日 発行

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第7集

発行 出雲市教育委員会

印刷 (有)ナガサコ印刷